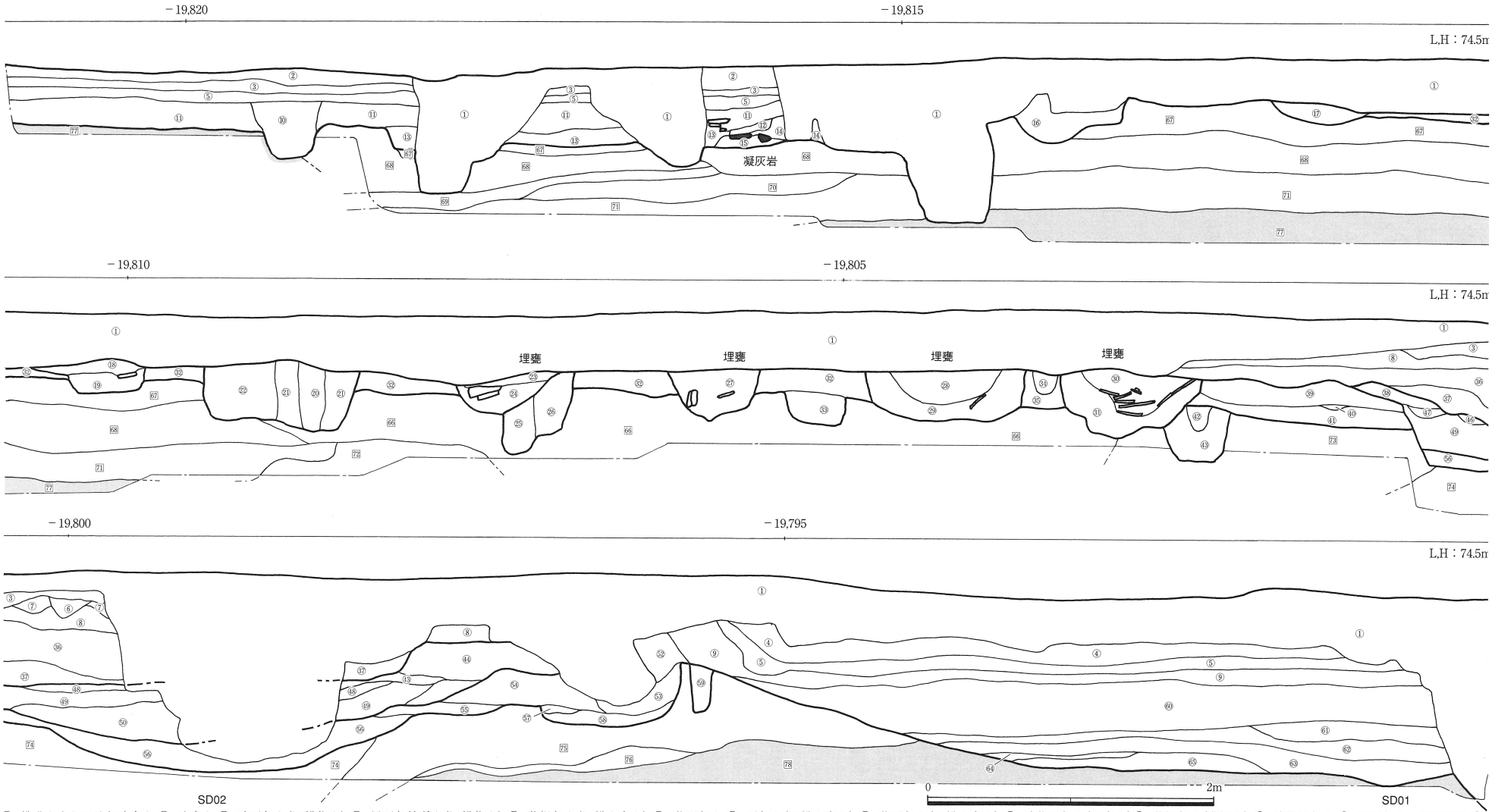
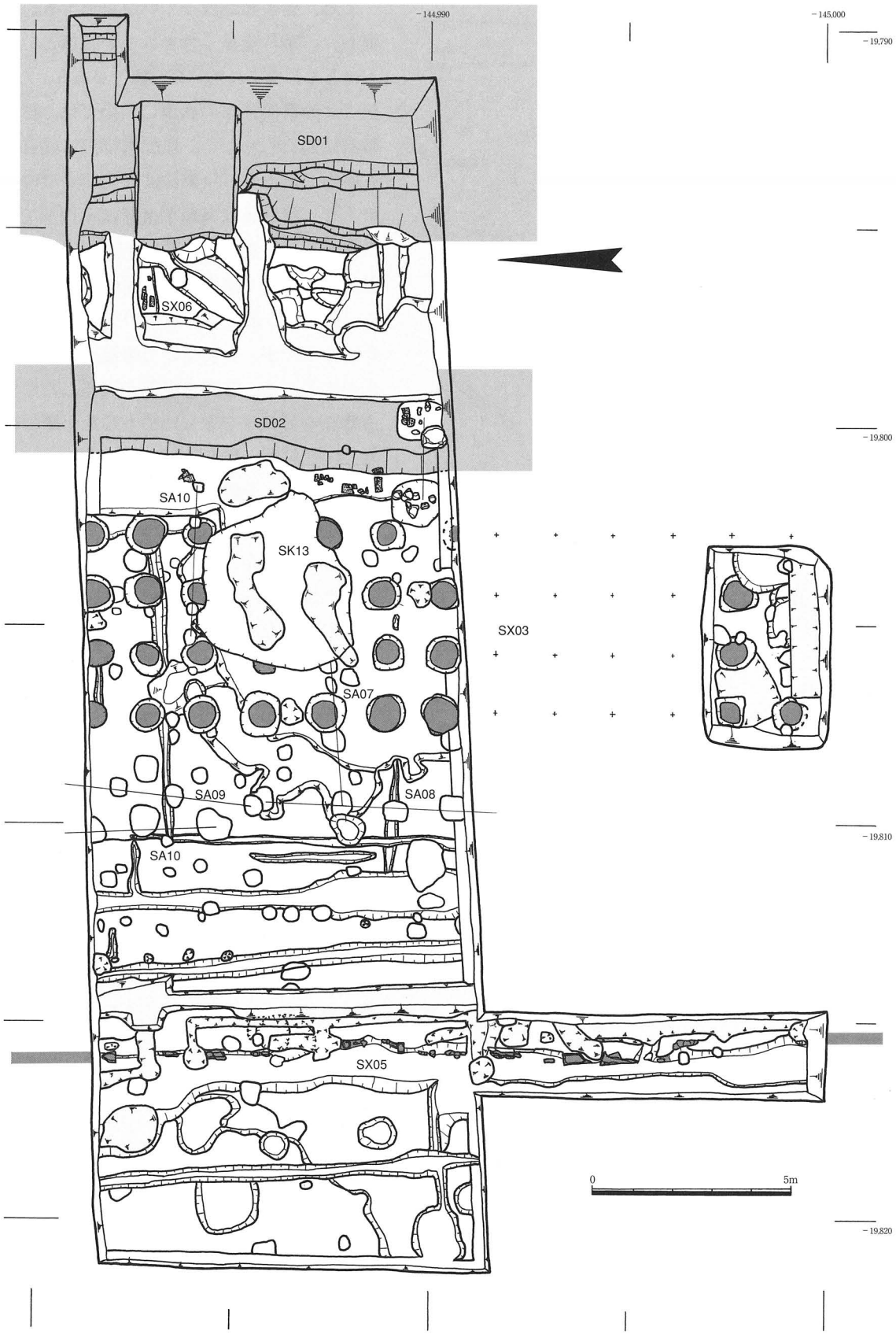


①：攪乱土または地盤改良土 ②：造成土 ③：暗灰色土（旧耕作土） ④：黒灰色粘質土（旧耕作土） ⑤：茶褐色土（旧耕土床土） ⑥：茶灰色土 ⑦：灰色土（旧耕土床土） ⑧：茶灰色土（旧耕土床土） ⑨：暗茶灰色土（旧床土） ⑩：茶褐色土（溝埋土） ⑪：暗茶褐色土 ⑫：暗灰色土＋凝灰岩粉 ⑬：明茶褐色粘質土 ⑭：暗茶灰色土 ⑮：暗茶灰色土（凝灰岩裏込め土） ⑯：暗茶灰色土（溝埋土） ⑰：淡茶灰色土（溝埋土） ⑱：暗灰褐色粘質土（柱穴埋土） ⑲：暗茶灰色粘質土（柱穴埋土） ⑳：暗褐色土（柱穴埋土） ㉑：暗褐色土（やや砂質・柱穴埋土） ㉒：暗褐色土（やや暗い・柱穴埋土） ㉓：暗灰色土（埋甕埋土） ㉔：茶褐色粘質土（埋甕埋土） ㉕：茶灰色粘土（下層柱穴柱根痕） ㉖：茶灰色土（柱穴埋土） ㉗：暗茶褐色土（埋甕埋土） ㉘：暗茶褐色土（埋甕埋土） ㉙：茶褐色土（埋甕埋土） ㉚：茶褐色土（埋甕埋土） ㉛：暗茶褐色土（埋甕埋土） ㉜：淡茶褐色粘質土 ㉝：暗茶褐色砂質土（下層柱穴埋土） ㉞：暗茶褐色土（柱穴柱根） ㉟：暗茶褐色土（柱穴埋土） ㊱：茶褐色土（SD02 上層埋土） ㊲：暗灰色砂質土（SD02 上層埋土） ㊳：暗黄灰色粘質土 ㊴：茶灰色粘質土 ㊵：暗灰色砂質土 ㊶：暗茶褐色粘質土（マンガン沈着） ㊷：暗灰色粘砂（下層柱穴埋土） ㊸：茶灰色砂質土（下層柱穴埋土） ㊹：茶灰褐色土（瓦包含・築地等閉塞施設基礎土？） ㊺：暗茶褐色土（やや砂質・SD02 中層埋土） ㊻：暗黄灰色粘質土 ㊼：暗茶灰色土 ㊽：暗灰褐色粘質土（SD02 中層埋土） ㊾：暗茶褐色粘質土（マンガン沈着・SD02 中層埋土） ㊿：暗灰色粘質土（植物質・木器等包含？ SD02 中層埋土） (51)：暗灰色土＋茶褐色土（SD02 中層埋土） (52)：茶灰色土（築地等閉塞施設基礎土？） (53)：茶灰色土（やや灰色・築地等閉塞施設基礎土？） (54)：茶褐色粘質土（マンガン沈着） (55)：暗茶灰色土（SD02 下層埋土） (56)：暗灰色粘土（SD02 下層埋土） (57)：灰色砂質土（築地等閉塞施設基礎土？） (58)：茶灰色砂質土（築地等閉塞施設基礎土？） (59)：暗灰色粘土（杭痕跡？） (60)：茶褐色土（ＳＤ01 埋土） (61)：暗灰色粘質土（ＳＤ01 埋土） (62)：暗青灰色粘砂（ＳＤ01 埋土） (63)：灰色粗砂（ＳＤ01 埋土） (64)：灰褐色粘土（ＳＤ01 埋土） (65)：暗灰色細砂＋暗青灰色粘土互層（ＳＤ01 埋土） (66)：淡茶灰色粘細砂または土（遺構ベース土） (67)：淡灰褐色粘土（遺構ベース土・時期不明の土師器細片包含） (68)：淡灰褐色粘細砂（遺構ベース土） (69)：暗灰褐色粘土（遺構ベース土） (70)：黄灰褐色粘細砂（遺構ベース土） (71)：黄灰色粘細砂 (72)：淡灰色砂（遺構ベース土） (73)：暗灰色砂（遺構ベース土） (74)：青灰色粘細砂（遺構ベース土） (75)：黄灰色粘砂（遺構ベース土） (76)：淡黄灰色シルト（遺構ベース土） (77)：黄灰色粘土（地山） (78)：青灰色粘土（地山）

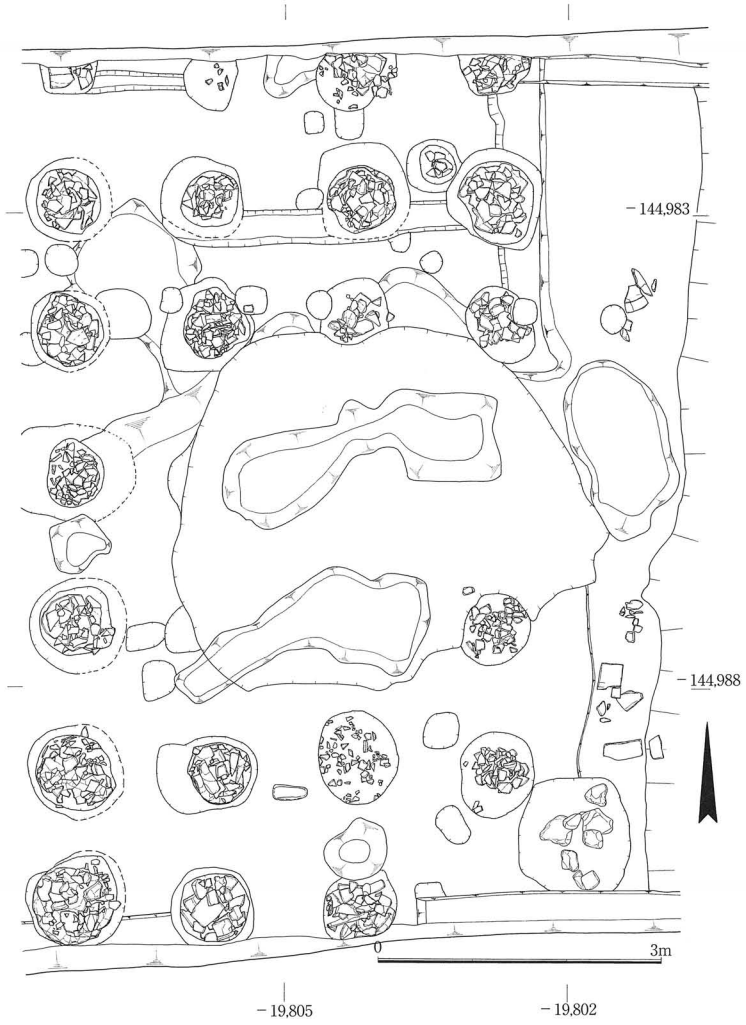
発掘区北壁土層図　1/40



第15次調査　遺構平面図　1/150

世紀後半頃の土器が、更には第Ⅲ期埋土の上層（茶褐色土）には12～13世紀以降の遺物が含まれ、各々堆積時期を知る上で手かがりとなる。遺構の位置関係から、ＳＤ01との関連が考えられ、雨落ち溝と推測される。

ＳＸ03は、発掘区のほぼ中央で検出した埋甕遺構群。発掘区内で計28基分を検出した。層位的には、造成土直下の淡茶褐色粘質土の上面から掘り込まれている。この淡茶褐色粘質土の堆積は、主にＳＸ03とその西側付近を中心とした部分にみられ、中には瓦片等の遺物が含まれており、整地土または埋甕遺構の基壇の盛土であ



埋甕遺構 SX03 平面図　1/40

る可能性もあろう。その堆積範囲の西限は、後述のＳＸ04の東側付近にまで及んでいる。

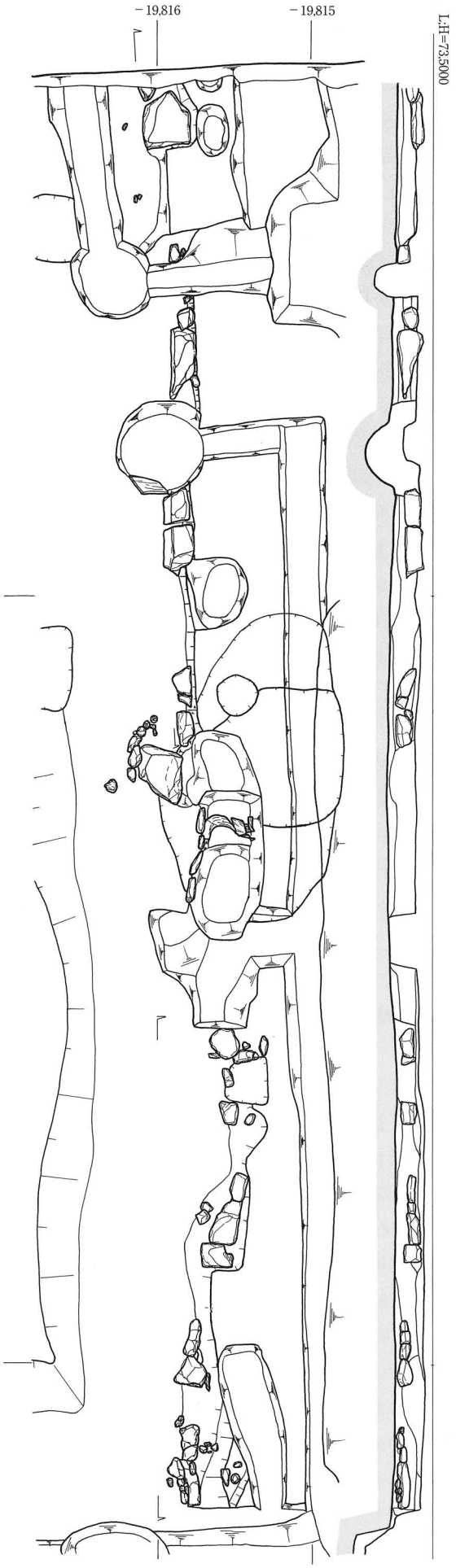
各埋甕は、掘形の中心間の距離が５小尺（約1.5m）となるよう配置されており、東西方向に４基ずつ、南北方向は少なくとも13列分以上が存在していたものと推定される。さらに発掘区外の北と南側へと続く可能性がある。各埋甕遺構の大半は掘形を確認しており、掘形の平面形は円形か楕円形で、径は1.1～1.5mと少しばらつきがある。甕が残存している場合は甕の胴部径から0.2～0.4m程度広い掘形であることが多い。甕の底は、必ずしも掘形の底部に接しているとは限らない。残存していた甕の胴部径も微妙に異なるので、甕を据えるにあたってはその器高や胴部径等を考慮し、埋甕の据える高さを調整していたと推測される。甕内の様相に着目して分類すると、須恵器甕底部が残存している例と、そうでない例とに分かれる。さらに、甕底部が残存している場合では、大量の丸瓦・平瓦や軒瓦が、甕の破片や土師器ともに含まれている例と、瓦類がほとんどなく甕や土師器が大半を占める例とに分かれる。この後者の例の中には、土師器が伏せて置かれたとみられる甕もあった。

また、甕底部が残っていない例でも、埋土中に甕や瓦の破片を多く含まれている例と、遺物自体がほとんど含まれていない例とがある。ただし、各例ごとの遺構分布の状況については、特に顕著な傾向は認められない。埋甕遺構内に残存していたり破片で出土する須恵器は大抵は大型の甕の一部であり、胴部径は概ね１m程度に復原できる。また出土した軒瓦には、西大寺創建瓦の6732型式に似るが中心飾りが異なる紋様の新型式軒平瓦がある。掘形より出土した遺物の大半は須恵器甕の破片であったが、９世紀の土師器小片が出土した掘形が１基ある。埋甕遺構群が廃絶した時期は、須恵器甕や軒瓦等とともに出土した土師器の年代から、10世紀中～後半頃と推測される。

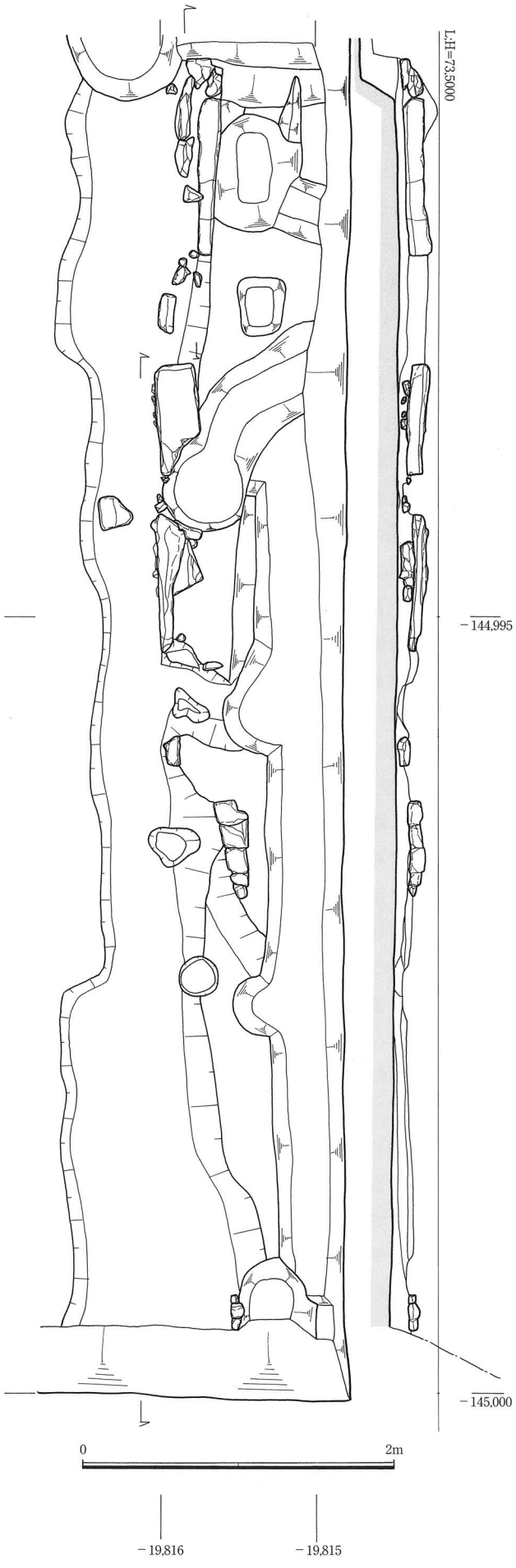
ＳＸ04は、発掘区の中央から東寄りの場所で検出した南北方向の凝灰岩列で、断続的に凝灰岩が列をなして残存していた。凝灰岩の多くは、崩落して原位置から移動していたり、あるいは表面の劣化が進むなどしていた。その中の比較的残存状況の良い凝灰岩には、石を加工した痕跡がみられた。石の大きさは10～140cmと一様ではなく、置き方についても様々である。板状に加工した石の幅の広い面が縦になるよう置いている場合もあれば、逆に幅の広い面が横になるように置いている場合も見受けられ、石の積み方には規則性は見えない。この点については、何らかの工法的な意図を反映している可能性もあるが、一方では転用石材を利用していたことに起因した様相の可能性もある。

さらに、これらの凝灰岩列は、淡灰褐色粘土層上に堆積する暗茶灰色土（マンガンが表面に沈着する）層上にある。この暗茶灰色土は、多くの凝灰岩の直下あるいは東側に分布しており、裏込土とみられる。この層内に包含される土師器は、型式からみて概ね10世紀前半頃のものであり、この時期を凝灰岩列が築造された年代に関する手かがりとして見なすことができる。

これらの凝灰岩列は必ずしも直線上に整列していない。すなわち、発掘区の北端から中央付近にかけては、各石の西端面はほぼ直線上に施工されているが、発掘区中央やや南よりの場所（国土座標値 X= －144,989～－144,990の間）に、明らかに板状の石を東西方向に置いたと確認できる箇所があり、そこを境に、石の西端面のラインはやや西側へ寄った傾向にある。更に、南側に拡張した発掘区部分の中央北寄りの場所には大きな板状の凝灰岩が据えられており（国土座標値 X= －144,993～－144,995付近）、一部は後世の攪乱により破壊されている



凝灰岩列 SX04 北半部立面・平面図　1/40



凝灰岩列 SX04 南半部立面・平面図　1/40

が、ほぼ原位置を保っている様相が見受けられる。この部分ではさらに西側へと石の西端面のラインが張り出している。そしてその南側で再度東側に寄っている形跡が看取され、発掘区外へと続く状況にある。これらの凝灰岩列の積石工法については、残存状況が良くないため詳細は不明ではあるが、奈良時代の大規模寺院の主要堂宇によくみられる壇正（上）積等の工法ではないと考えられる。

ＳＸ05は、凝灰岩列ＳＸ04の西側で検出した平面不整形の性格不明の窪み状の遺構。深さは0.1～0.3ｍで、ＳＸ04の西側に帯状に拡がる様相を呈するが、部分的には西側へ拡がり発掘区外へと延びる部分もあり、全体としては不整形である。埋土は凝灰岩列ＳＸ04の西側の面や崩落した凝灰岩片を埋めるような状況であり、埋土から奈良時代から平安時代にかけての丸瓦・平瓦や土器のほか、前述の6732型式に似るが中心飾りの異なる新形式軒平瓦や、奈良三彩、灰釉陶器等が出土した。土器の年代から、10世紀後半頃に埋まったとみられ、前述のＳＸ04の廃絶の時期を示す重要な手掛かりである。

ＳＸ06は、前述のＳＤ01と02の間で検出した東西方向の溝状の遺構。北・西・東側は攪乱により破壊されていたが、東西約1.2ｍ、南北約0.5ｍ分を検出した。深さは0.1ｍ～0.2ｍ程度で、中央部分が浅く、西側と東側は比較的深くなる傾向にある。内部には丸瓦を東西方向に凹面を上にして置いている。雨落ち溝とみられる前掲ＳＤ02の第Ⅲ期に東側に形成された積土と考えられる茶灰褐色土層直上より掘り込まれている。ＳＸ06は、位置的にはＳＤ02とかつての条坊側溝であるＳＤ01の間にあって、両者を繋ぐような形状を呈し、第Ⅲ期の時期においてＳＤ02に溜まった水をＳＤ01へと排出するための施設であった可能性が高い。通常、条坊側溝と雨落ち溝の間には、築地の存在が想定されるが、今回の調査では、築地の存在を明確に示す遺構は確認されていない。また、ＳＤ01の東肩とＳＤ02の西肩の間隔は、検出した遺構の状況をみる限りでは最大でも約２ｍ弱しかなく、京内寺院の築地を想定するにはいささか狭いと思われる。よって、築地ではなく板塀など他の構造の閉塞施設であった可能性もあろうが、ＳＸ06はこうした何らかの閉塞施設と並存して、排水の機能を果たしていたと考えられる。

なお、ＳＸ06の最深部の標高が約73.5ｍであるのに対し、ＳＤ02第Ⅲ期の溝底部の標高は約73.4ｍ程度であるので、ＳＸ06の底部の方がやや高くはなっているものの、排水機能は充分に果たせていたことは想定できる。以上の点からみて、ＳＸ06は暗渠と考えられる。

ＳＡ07～12は、発掘区の中央付近で検出した掘立柱穴列である。このうち、ＳＡ07～10については、いずれも埋甕遺構群ＳＸ03の西側で検出した。ＳＡ07はＳＸ03よりも古く、またＳＡ09はＳＡ08よりも新しいことが、遺構の重複関係から確認できる。ただし、建物として組み合う柱穴は見当たらない。これらの多くは埋甕が設置される以前の時期の遺構とみられる。また、遺構の重複関係から、ＳＡ11はＳＸ03より新しい。さらに、ＳＡ12は礎石据え付け穴の痕跡であり、建物になる可能性が高い。東側の穴は、雨落ち溝とみられるＳＤ02の第Ⅱ期の埋土が堆積した上から掘り込まれている。上層の第Ⅲ期埋土に含まれる土器の年代などからみて、ＳＡ12は平安時代以降の時期の遺構と推測される。位置的には築地想定地にも近いことから、門などの施設が想定されよう。このほか、ＳＸ03の下層や西側部分を中心に複数の柱穴を検出した。これらは埋甕遺構以前の遺構の可能性もあるが、削平などもあり明確に建物跡としてはまとまらない。

ＳＫ13は、発掘区のほぼ中央で検出した土坑。東西約4.5ｍ、南北約４ｍの平面不整形を呈し、遺構の重複関係からみて前述のＳＸ01よりも新しい。未完掘のため深さは不明であるが、埋土中からは14世紀前半頃の土師器片が出土し、埋没時期を知る重要な手掛かりである。

Ⅳ．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱約184箱分ある。その大半は奈良時代から平安時代にかけての土器・瓦が占める。土器・土製品類は、奈良～平安時代土師器・須恵器・黒色土器（Ａ・Ｂ類）、灰釉陶器・緑釉陶器、奈良三彩、製塩土器、鎌倉時代瓦器、室町時代土師器、中国産陶器（唐三彩陶枕）がある。瓦・塼類は、奈良～平安時代の丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦（熨斗）・塼がある。詳細は今後機会を見て別稿にて報告したい。

Ⅴ．まとめ

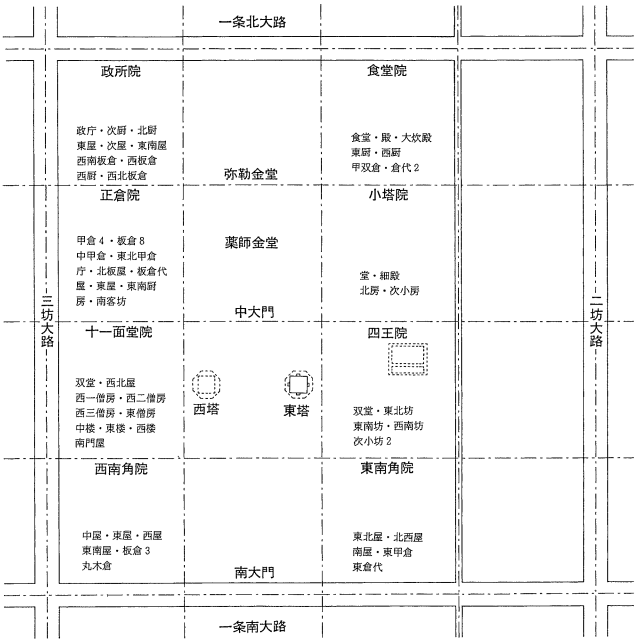
今回の調査で確認した埋甕遺構群ＳＸ03と、ほぼ同じ10世紀中～後半頃にかけての時期に廃絶したとみられる凝灰岩列ＳＸ04の両者は、ともに並存していた可能性が高い。ただし、両者が関連性のある遺構であったかどうかを知るための直接の手がかりは、攪乱や削平などもあって、今回の調査では得られてはいない。

しかしながら、双方の遺構の位置関係をみると、ともに南北方向に並行する状況にあり、さらには両端が発掘区外へと延びていく点では様相は一致しており、注目される。このほか廃絶の時期がほぼ同じとみられることや、ＳＸ03直下の堆積である淡茶褐色粘質土が西側に拡がり、ＳＸ04の東側付近にまで及んでいる状況等を考慮すると、両者は一体の遺構である可能性はかなり高いとみられる。すなわち、淡茶褐色粘質土はＳＸ03の埋甕群の設置に伴い、周辺を整地あるいは基壇状に盛土した

際に形成された層と考えられ、その西側面の法面保護の石積みの施工として、ＳＸ04の凝灰岩列が比定できよう。

ところが、仮にそう想定した場合、いくつか検討すべき点もある。第一には、埋甕群と凝灰岩列の間には約８m程度の間隔があることである。この場所にはいくつか柱穴が見つかっているが明確に建物としてまとまるものはなく、しかも時期的には埋甕群の時期とは並存しないものばかりである可能性が高い。つまり埋甕群が設置されていた時期には空閑部分であった可能性が高く、如何なる利用がされていたのか、今後の検討課題である。次に、埋甕群の東側に凝灰岩列の施工がみられない点も、大きな疑問点である。仮に、凝灰岩列を基壇などの外周の施工とみなすのであれば、当然埋甕群の東側にも似たような遺構が想定されるのであるが、今回の調査では確認されなかった。この点については、埋甕群のすぐ東側は築地の雨落ち溝と想定される溝ＳＤ02があるので、あるいはこの溝の掘削により消滅したか、もしくは元々東側は石積みを施工していなかった可能性もある。さらに、埋甕遺構群ＳＸ03の全体を覆うような大規模な建物跡が確認できなかった点も疑問点として挙げられる。この点については、小規模な柱穴がいくつかあることから、仮設覆屋のような簡易型の建物で覆われていた、あるいは埋甕群自体が基壇上にありつつも露天状態になっていた、または床面の高さが更に高い位置にあり、遺構自体がかなり削平されたため、礎石据え付け穴や柱穴の痕跡が失われたの計３とおりの解釈が想定できる。

ただ、埋甕遺構群の一部に残存していた須恵器甕の底は、遺構を検出した面より0.4m程度下であり、仮にこれらの甕が胴部中腹付近まで埋められて、当時の床面が形成されていたと仮定するならば、当時の床面は遺構を検出した面の上方0.2～0.3m付近と推測できる。このような想定をすると、柱穴や瓦葺建物等によくみられるような礎石据え付け穴の遺構は削平されずに残存しているであろうから、本来存在していたのであれば、今回の調査において検出されている筈である。一方、甕の頚部まで埋めて床面を形成していたと仮定するのであれば、当時の床面は遺構検出面の上0.6～0.7m付近と想定され、場合によっては削平等によって柱穴はもちろん、小規模な礎石据え付け穴などでも、その痕跡が失われている可能性もあろう。ただし、それだけの高さの床面を構築しようとした場合、その外周は土留めのために相応の法面施工等をする必要が生じるとみられる。しかし、今回検出した凝灰岩列ＳＸ04は、残存状況が良くないために詳細な構造は不明であるものの、壇正（上）積基壇のような施工ではないであろう。以上のような想定を総合すると、どうやら調査地の中で埋甕群ＳＸ03を覆う大規模な掘立柱建物や礎石立建物のような施設は存在していなかった可能性が高いのではないかと思われる。



西大寺主要伽藍地区の配置復原図（奈文研・奈良県教委1990より）

ところが、現在までに平城宮・京跡や他の都城遺跡で多く検出されている埋甕遺構の類例をみると、そのほとんどは比較的耐久性のある建築物と一体の構造であり、しかもその多くが造酒に関係する施設として想定されている。また一方では、現代の事例ながらも、伝統的に露天に甕を置いて食物を保管・貯蔵している例がいくつか知られているので、埋甕施設の構造と貯蔵物の関係等の問題は、今後さらに検討をしていく必要があろう。

なお、『西大寺資財流記帳』やその他西大寺に伝わる絵図等によると、調査地付近は西大寺の食堂等の施設が想定されている。その『西大寺資財流記帳』は同時に各施設の規模や屋根の形態についても伝えており、「倉」の存在などが見える。今回確認した埋甕遺構群の規模（南北幅で約19m）に見合う規模の建物もいくつかあるものの、「倉」という名の付く施設の記載には、見合う規模の施設はない。倉以外で、位置的・規模的に同等な施設としては、東檜皮厨（長11丈・廣２丈）があるが、ＳＸ03の検出位置が条坊側溝に程近い、築地が想定される場所のすぐ西側である点を考慮すると、少々疑問がある。

また、『西大寺資財流記帳』の成立が奈良時代末（宝亀十一年〔781〕紀年）であることに留意をしておく必要がある。埋甕遺構群ＳＸ03が形成された詳細な時期は特定できていないが、少なくとも１基の掘形からは９世紀頃の土師器小片が出土している。もちろんこれはたまたま当該の甕が破損等をしたなどの事由で取り替えら

れた際の遺物である可能性も排除できない。しかしその一方で、前項において考察したように、仮に西側の凝灰岩列ＳＸ04と一体の遺構であったなら、10世紀の前半頃に形成され、10世紀中～後半頃には廃絶したということになって、『西大寺資財流記帳』よりも後世の遺構である可能性が生じてくるであろう。

埋甕遺構群ＳＸ03は、検出遺構の状況やその位置、そして時期的な問題等、『西大寺資財流記帳』にある施設に直接比定をすることは困難ではないかとみられる。ただし、『西大寺資財流記帳』に見える食堂院の諸施設のいずれかの後継施設の遺構である可能性はあるかもしれない。

このほか、発掘区の東側で検出した南北方向の溝ＳＤ01は、位置的には西三坊坊間東小路の西側溝として考えられる。ただし、埋土中から15世紀の遺物が出土した点には留意する必要がある。平城京内の条坊遺構に関しては、奈良時代以降も水路として機能していたものが多いとみられ、実際にこれまでの平城京内の調査でも埋土中に鎌倉時代以降の遺物を包含する事例がいくつか確認されている。このSD01についても、そうした事例の一つとして見なすことができ、平城京廃絶以降もかなり長い期間にわたって機能し続けていたことが想定される。この背景には、西大寺旧境内の中でも、ＳＤ01が主要伽藍地区の東辺に位置していて、造営以来ずっと境内地の東辺を区画する施設としての役割を果たし続けていた可能性が指摘できる。かかる事実は、中世以降の西大寺と秋篠寺との境界争いや、西大寺の土地利用の問題を考える上では、ひとつの重要な手掛かりともなろう。

（武田和哉）

《主要参考文献》
（財）元興寺文化財研究所『平城京右京北辺』2005
奈良国立文化財研究所・奈良県教育委員会『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺　1990
佐藤信『「西大寺古絵図の世界」』東京大学出版会 2004
奈良国立博物館『特別陳列西大寺絵図は語る古代・中世の奈良』2002

凝灰岩列 SX04（南から）

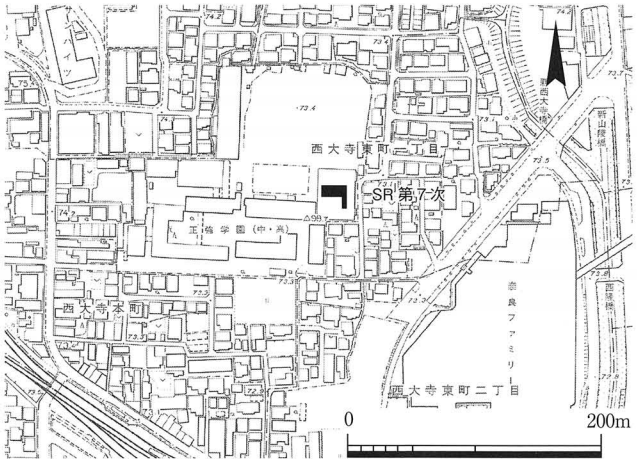
埋甕遺構 SX03（南から）

発掘区東側部分（北から）

発掘区南拡張区　埋甕遺構 SX03（南から）

23. 平城京跡（一条北大路）西隆寺跡の調査　第７次

調査次数	ＳＲ第７次	調査期間	平成16年２月９日～３月19日
事業名	西大寺近隣公園整備事業	調査面積	230㎡
通知者名	奈良市長	調査担当者	山前智敬
調査地	奈良市西大寺東町一丁目70－４他		



第７次調査　発掘区位置図　1/6,000

発掘区全景　北東から

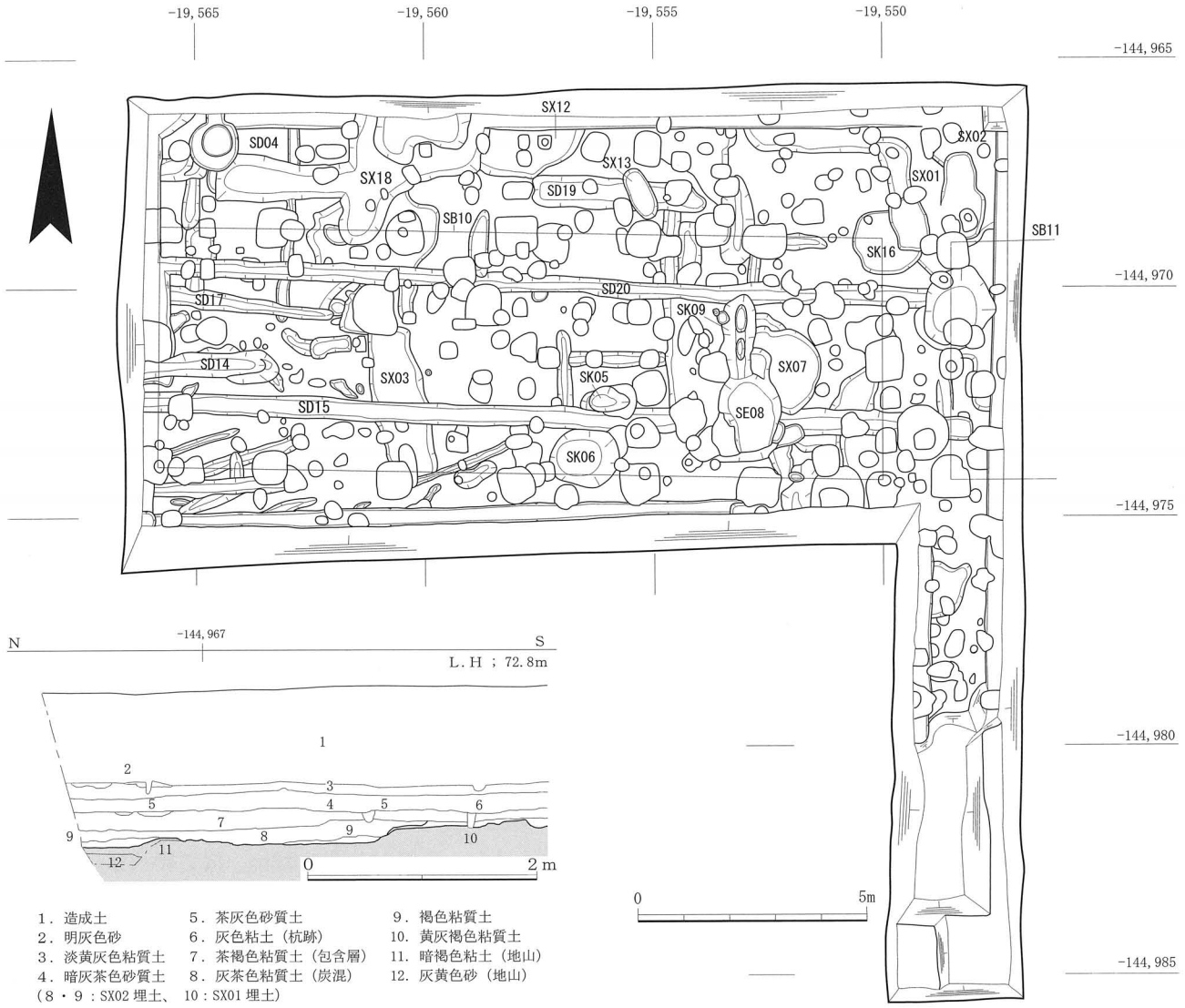
調査地は、平城京の条坊復原では一条北大路の路面が想定されている。しかし、平成15年度に元興寺文化財研究所が本調査地の西側で実施した調査[1)]では、一条北大路の両側溝を検出しており、大路は条坊復原図の想定位置より北側に位置することが新たに判明した。この調査では、一条北大路の他に西二坊大路とその両側溝、古墳時代や奈良時代～鎌倉時代の掘立柱建物や井戸・土抗・溝を検出している。したがって、今回の調査では、古墳時代～鎌倉時代の遺構の有無、西隆寺跡（右京一条二坊十六坪）の北端の様相確認を目的とした。

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土、淡黄灰色粘質土、暗灰茶色砂質土、茶褐色粘質土または茶灰色砂質土（遺物包含層）と続き、地表下約1.1ｍで暗褐色粘土または黄灰色粘質土の地山に至る。地山の標高は概ね72.4mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出した遺構には奈良時代～鎌倉時代の遺構がある。以下で概要を述べる。

奈良時代の遺構　土坑ＳＸ01～03・07、ＳＫ05・06、溝ＳＤ04がある。ＳＸ01は東西2.7m以上、南北6.5m以上、深さ0.1m。埋土から古墳時代の土師器、８世紀の須恵器、丸・平瓦が出土した。重複関係からＳＸ02、ＳＢ11、ＳＫ16よりも古い。ＳＸ02は東西1.5m以上、南北2.5m以上、深さ0.2m。埋土から８世紀後半の土師器、奈良時代の丸・平瓦、製塩土器が出土した。重複関係からＳＸ01よりも新しい。ＳＸ03は東西約1.0m、南北4.2m以上、深さ約0.1m。重複関係からＳＢ10、ＳＤ15よりも古い。ＳＤ04は幅約0.3m、深さ約0.1m。長さ4.7m分を確認した。重複関係からＳＤ17・20、ＳＸ18よりも古い。ＳＫ05は東西約1.0m、南北約0.8m、深さ約0.5m。重複関係からＳＤ15よりも古い。ＳＫ06は東西約1.4m、南北約1.2m、深さ約0.6m。重複関係からＳＤ15よりも古い。ＳＸ07は東西1.4m以上、南北2.0m以上、深さ約1.1m。重複関係からＳＥ08、ＳＫ09、ＳＤ15よりも古い。ＳＸ03・07、ＳＫ05・06、ＳＤ04からは、８世紀以降の土師器・須恵器が出土した。

平安時代の遺構　井戸ＳＥ08、土坑ＳＸ12・13・16・18、ＳＫ09、溝ＳＤ14・15・17・19・20、掘立柱建物ＳＢ10・11がある。ＳＥ08は東西約1.3m、南北約1.7m、深さ約1.0m。枠材は抜き取られている。埋土から８世紀の須恵器、８世紀末～９世紀初めの土師器・須恵器、奈良時代の丸・平瓦、製塩土器、時期不明の砥石、石器が出土した。重複関係からＳＸ07より新しく、ＳＫ09、ＳＤ15よりも古い。ＳＫ09は東西約0.7m、南北約2.0m、深さ約0.8m。重複関係からＳＸ07、ＳＥ08より新しく、ＳＤ20よりも古い。ＳＢ10は桁行６間（16.2m）、梁間２間（5.4m）の東西棟建物。重複関係からＳＤ14、ＳＫ16、ＳＸ18よりも古く、ＳＸ04よりも新しい。ＳＢ11はＳＢ10と柱筋が揃う桁行１間以上、梁間２間（5.4m）の東西棟建物と思われる。柱穴埋土から９世紀の須恵器・土師器が出土した。ＳＸ12は東西1.５m以上、



1．造成土
2．明灰色砂
3．淡黄灰色粘質土
4．暗灰茶色砂質土
（8・9：SX02 埋土、10：SX01 埋土）
5．茶灰色砂質土
6．灰色粘土（杭跡）
7．茶褐色粘質土（包含層）
8．灰茶色粘質土（炭混）
9．褐色粘質土
10．黄灰褐色粘質土
11．暗褐色粘土（地山）
12．灰黄色砂（地山）

第７次調査　遺構平面図　1/150　　同　発掘区東壁（北端）土層図　1/60

南北1.1m以上、深さ約0.1m。重複関係からＳＸ18よりも古い。ＳＸ13は東西約0.5m、南北約1.0m、深さ約0.5m。重複関係からＳＤ19よりも古い。ＳＤ14は幅0.5m、深さ約0.2m。長さ2.9m分を確認した。ＳＤ15は幅約0.4m、深さ0.1～0.2m。長さ18m分を確認した。埋土から軒平瓦6691D、製塩土器、棒状鉄製品、鉄滓などが出土した。ＳＸ12・13、ＳＤ14・15から９世紀以降の土師器・須恵器が出土した。ＳＫ16は東西約1.4m、南北約1.2m、深さ約0.5m。埋土から９世紀の土師器・須恵器、10世紀の土師器などが出土した。ＳＤ17は幅約0.3m、深さ約0.5m。長さ3.6m分を確認した。埋土から古墳時代の土師器、９世紀の土師器・須恵器、10世紀の土師器が出土した。ＳＸ18は東西2.8～4.0m、南北3.3m以上、深さ0.05～0.3m。埋土から古墳時代の須恵器、８～９世紀の土師器・須恵器、10世紀後半～11世紀初めの土師器、砥石、鞴の羽口が出土した。ＳＤ19は幅約0.7m、深さ約0.1m、長さ2.9m分を確認した。埋土から９世紀の土師器、11世紀の土師器が出土した。

鎌倉時代の遺構　溝ＳＤ20がある。ＳＤ20は幅約0.4m、深さ約0.1～0.2m。長さ19m分を確認した。埋土から古墳時代の土師器・須恵器、９世紀の土師器・須恵器、黒色土器Ａ類、10世紀の土師器、12～13世紀の土師器、瓦器、時期不明の製塩土器、鉄滓が出土した。

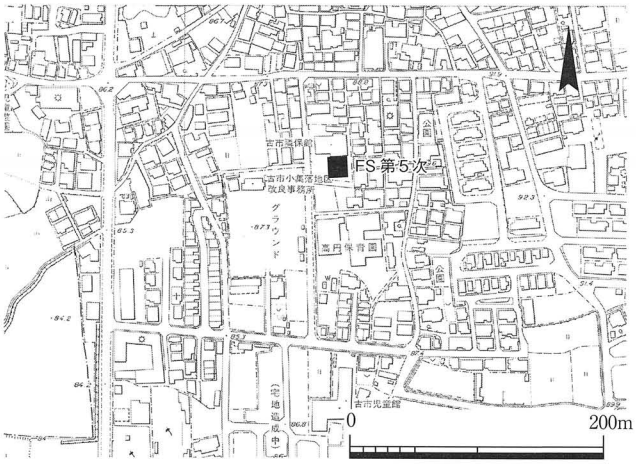
他に、建物としてはまとまらない時期不明の柱穴や小土坑を多数検出した。

今回の調査で、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構を検出したが、古墳時代の遺構は検出できなかった。しかし、古墳時代の遺物が少なからず出土していることから考えて、調査地周辺に遺構がある可能性が高いと考える。また、９世紀には、大型の東西棟建物が棟を揃えて２棟並んで建っており、『日本三代実録』の元慶４（880）年５月19日壬申条に、西隆寺を西大寺に摂領させるという記事があり、奈良時代後半に建立された西隆寺に伴う建物の可能性が高いと考える。　（山前智敬）

1）（財）元興寺文化財研究所『平城京右京北邊』2005

24. 古市遺跡の調査　第５次

調査次数	ＦＳ第５次	調 査 期 間	平成15年５月６日～６月12日
事 業 名	古市人権文化センター建設事業	調 査 面 積	302.75㎡
通知者名	奈良市長	調査担当者	久保清子
調 査 地	奈良市古市町1226		



第５次調査　発掘区位置図　1/6,000

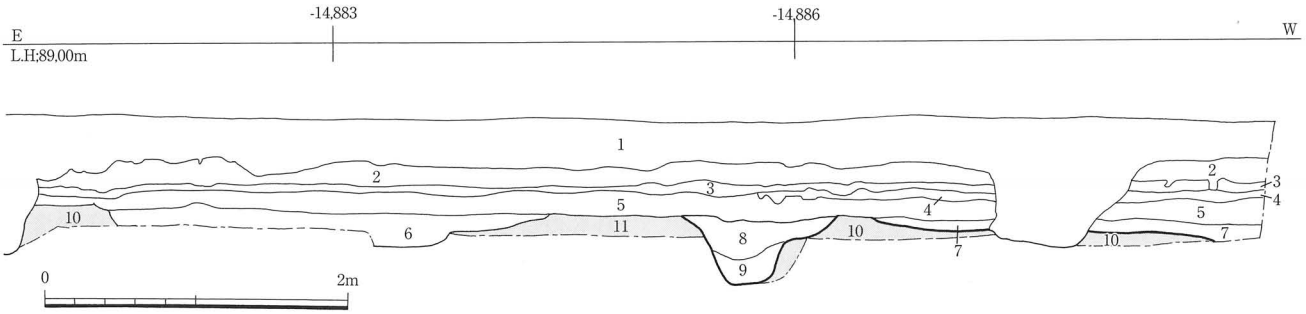
第５次調査　発掘区全景（北西から）

Ⅰ．はじめに

調査地は、高円山の西麓の岩井川によって形成された扇状地上に位置し、北側には岩井川が流れている。また、古墳時代から安土桃山時代にかけての複合遺跡である古市遺跡に該当し、周辺には、古市方形墳、古市狐塚古墳が点在している。古市遺跡では、これまでに市が４次の調査[1)]を実施しており、古墳時代中・後期の竪穴建物、掘立柱建物、土坑、奈良～平安時代の掘立柱建物、安土桃山時代の井戸等を検出している。また、平成７年度に周辺一帯の踏査[2)]を実施しており、踏査地全域で弥生時代から近世にわたる幅広い時期の遺物が散布していることが判明している。

今回の調査は、以上の成果を踏まえた上で、古市遺跡の性格をより明らかにすることを目的として調査を実施した。

発掘区内の層序は、東半は上から造成土（0.2～0.3 m）、耕土（0.1 m）、床土である灰色粘砂土（0.05 m）と続き、地表下 0.5 mで黄灰色粘土または灰褐色礫の地山に達する。南西部及び北西部では床土の下に黄灰色砂質土（0.05 m）と奈良時代の整地土である灰褐色粘土（0.1～0.2 m）が堆積しており、地表下 0.7～0.8 mで黄灰色粘土または青黄灰色シルトの地山に至る。地山上面の標高は発掘区東端で 88.0 m、南西隅で 87.8 m、北西隅で 87.7 mである。遺構は奈良時代整地土上面もしくは地山上面で検出した。なお、旧建物部分及び排水管埋設箇所については、削平が著しいため、遺構は残存していなかった。



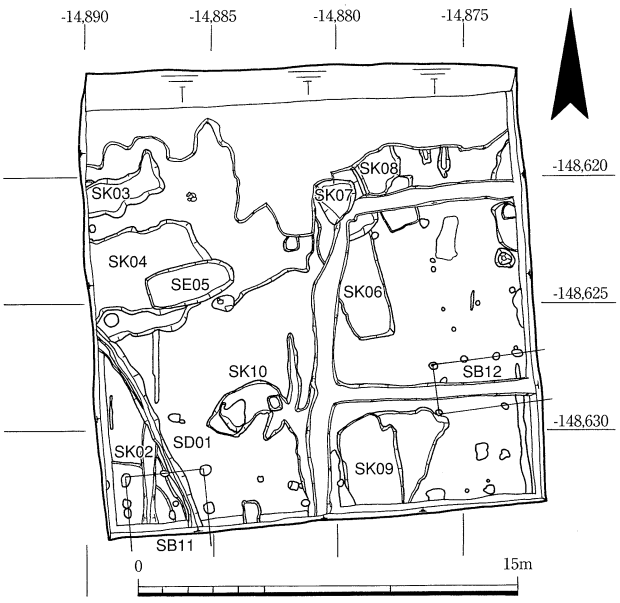
1 造成土　3 灰色粘砂土（旧床土）　5 灰褐色粘土　7 暗灰色砂質土（炭含む・SK02埋土）　9 暗灰色粘質土（炭含む・SD01埋土）
2 黒灰色粘質土（旧耕土）　4 黄灰色砂質土　6 暗灰色粘土と灰色シルトの混合土　8 暗灰色粘土と黄褐色シルトの混合土（SD01埋土）　10 黄灰色粘土（地山）
11 青黄灰色シルト（地山）

第５次調査　発掘区南壁土層図　1/50

Ⅱ．検出遺構

古墳時代の遺構　溝１条、土坑６基、井戸１基がある。ＳＤ01は幅0.5～0.7ｍ、断面形がＶ字形で、検出面からの深さ0.5ｍの南東から北西方向へ流れる素掘りの溝である。埋土からは弥生時代後半から古墳時代初頭頃の土器が遺物整理箱１箱分とサヌカイト剥片３点が出土した。重複関係からＳＫ02・ＳＢ11よりも古い。ＳＫ02は東西2.4ｍ以上、南北3.0ｍ、検出面からの深さ0.1ｍの平面が不整円形の土坑である。埋土からは、古墳時代前～中期の土師器が少量出土した。重複関係からＳＢ11よりも古い。ＳＫ03は東西3.0ｍ以上、南北1.5ｍ、検出面からの深さ0.15ｍの平面が不整形の土坑である。埋土からは、古墳時代前～中期頃の土師器が少量出土した。ＳＫ04は東西4.8ｍ以上、南北4.2ｍ、検出面からの深さ0.2ｍの平面が不整形の土坑である。埋土からの出土遺物はない。重複関係からＳＥ05よりも古く、ＳＤ01より新しい。ＳＥ05は東西3.4ｍ、南北1.6ｍ、検出面からの深さ0.4ｍの平面が不整長方形の井戸である。枠材は残存しておらず、抜き取られていると考えられるが、素掘りの井戸である可能性も考えられる。埋土からは、時期不明の土師器が少量出土した。重複関係からＳＫ04よりも新しい。ＳＫ06は東西1.8ｍ、南北2.7ｍ、検出面からの深さ0.2ｍの平面が不整長方形の土坑である。埋土から時期不明の土師器が少量出土した。重複関係からＳＫ07よりも古い。ＳＫ07は東西2.6ｍ、南北6.6ｍ以上、検出面からの深さ0.2～0.3ｍの平面が不整長方形の土坑である。埋土から古墳時代前～中期頃の土師器と時期不明の土師器・須恵器が少量出土した。重複関係からＳＫ06よりも新しい。ＳＫ08は東西2.0ｍ、南北3.0ｍ以上、検出面からの深さ0.1ｍの平面が不整長方形の土坑である。埋土から古墳時代前～中期頃の土師器と時期不明の土師器が少量出土した。ＳＤ01・ＳＫ02～04・ＳＥ05は奈良時代の整地土下の地山上面で、ＳＫ06～08は地山上面で検出した。

奈良時代の遺構　土坑２基、掘立柱建物２棟がある。ＳＫ09は東西4.4ｍ、南北4.0ｍ以上、検出面からの深さ0.25ｍの平面が不整円形の土坑である。埋土からは、奈良時代のものと考えられる須恵器と時期不明の土師器が少量出土した。ＳＫ10は東西3.2ｍ、南北1.6ｍ以上、検出面からの深さ0.2ｍの平面が不整形の土坑で奈良時代整地土上面から掘り込まれている。炭化物を多く含む埋土からは、奈良時代の食器類を中心とする土師器及び須恵器が合わせて遺物整理箱2/3箱分出土した。ＳＢ11は東西２間（3.0ｍ）、南北１間（1.5ｍ）以上の掘立柱建物で、南側は発掘区外へと続く。奈良時代整地土下



遺構平面図　1/300

で検出した。重複関係からＳＤ01・ＳＫ02よりも新しい。柱穴掘形埋土からは時期不明の土師器が少量出土した。建物の主軸は、国土方眼方位北で西へ５°振れる。ＳＢ12は東西３間（3.4ｍ）以上、南北１間（1.9ｍ）の東西棟の掘立柱建物で、地山上面で検出した。埋土からは時期不明の土師器が少量出土した。建物の主軸は、国土方眼方位北で西へ７°振れる。

他に、奈良時代整地土上面で耕作に伴うと考えられる素掘り溝を多数確認した。埋土からは13世紀頃の瓦器や土師器が出土している。

Ⅲ．まとめ

①今回の調査結果から、弥生時代後期から古墳時代初頭頃には既に遺跡内で人々が生活していることがわかった。過去の調査では、包含層や地山上面で縄紋時代や弥生時代の遺物が出土していることから、周辺にはさらに古い時期の遺構が存在している可能性が高い。

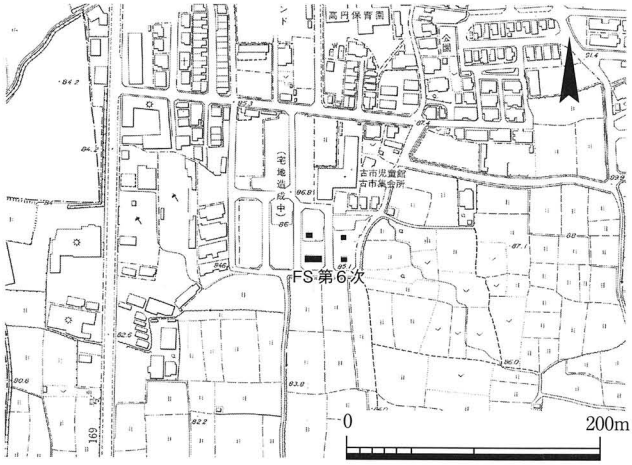
②調査地は古墳時代から奈良時代にかけては宅地の一部として利用されていたことが考えられる。平安時代については調査地の西側では建物が見つかっているが、今回は遺構、遺物とも見つからなかった。その後の鎌倉時代には耕作地として利用されていたと考えられる。

③今回図示できなかったが、奈良時代の土坑SK10から出土した土師器及び須恵器は、平城京内で一般的に出土しているものよりも器壁が厚く、胎土に砂粒を多く含むものが多い。　（久保清子）

1）奈良市教育委員会「古市町内遺物散布地の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和57年度』1983・「古市遺跡の調査　第２次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成７年度』1996・「古市遺跡の調査　第３・４次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成８年度』1997
2）「古市遺跡の調査　第２次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成７年度』1996

25. 古市遺跡の調査　第６次

調査次数	ＦＳ第６次	調 査 期 間	平成16年６月10日～7月１日
事 業 名	第10号（古市）市営住宅建替事業	調 査 面 積	238㎡
届出者名	奈良市長	調査担当者	秋山成人
調 査 地	奈良市古市町1266－１番地他		



第６次調査　発掘区位置図　1/6,000

今回の調査地周辺の調査には、昭和57年度に、北隣接地で古市児童館建設に伴う発掘調査（市ＦＳ第１次調査）を実施したが、遺構を検出することはできなかった。しかし、敷地の北東約150ｍの地点で、平成７年度に第10号（古市）市営住宅建替事業に伴う発掘調査（市ＦＳ第２次調査）を実施したところ古墳時代中期から後期の竪穴建物・掘立柱建物・井戸・土坑・溝を検出することができた。今回の調査においても、古墳時代の遺構の検出と土地の利用状況を知ることを調査目的として実施した。

調査地の地形は、北から南に下降し、すでに雛壇状に宅地造成され、敷地の東半をＡブロック、西半をＢブロックに区画されている。調査は、Ａブロック北に第１発掘区49㎡、南に第２発掘区49㎡、Ｂブロック北に第３発掘区49㎡、南に第４発掘区91㎡を設けて行った。

発掘区内の基本的な層序は、第１発掘区では、上から造成土、黒灰色土（耕作土）、灰色砂質土と続き地表下2.1ｍで、青灰色砂礫（谷又は河川堆積土）となる。第２発掘区では、上から造成土、黒灰色土（耕作土）、灰色砂質土、暗灰色粘砂と続き地表下0.8ｍで、青灰色砂礫（谷又は河川堆積土）となり、以下灰色粗砂（谷又は河川堆積土）、黄灰色粘砂（地山）となる。第３発掘区で、地表下約３ｍまで掘削したが、宅地造成時の撹乱の堆積が続く。第４発掘区では、上から造成土、黒灰色土（耕作土）、灰色砂質土、淡褐色砂質土と続き地表下1.2ｍで、青灰色粘土（谷又は河川堆積土）、青灰色砂礫（谷又は河川堆積土）となる。第１発掘区・第２発掘区とも青灰色砂礫上面の標高は、84.4ｍ。第２発掘区の青灰色砂礫の下層に堆積する黄灰色粘砂（地山）上面の標高は、82.7ｍである。第２発掘区の青灰色砂礫上面において、南壁から発掘区区外南へ広がる時期不明の土坑又溝を検出した。第４発掘区の青灰色砂礫上面の標高は、84.0ｍである。青灰色砂礫上面において７世紀後半の土器を包含する溝を検出した。

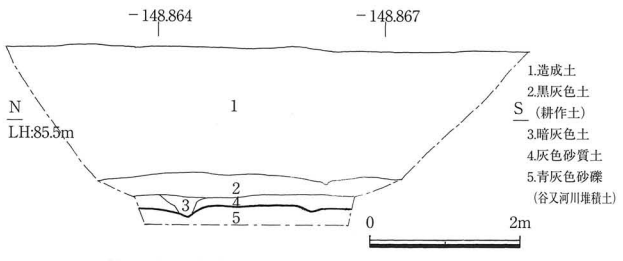
ＳＤ01は、第４発掘区の中央を東西に延びる素掘りの溝で、長さ10.4ｍ以上、幅0.64ｍ、深さ0.12ｍである。掘形の断面形は、Ｕ字形である。埋土は褐灰色土で、７世紀後半の土師器甕、須恵器杯蓋・壷の小片が出土した。

ＳＸ02は、南壁から発掘区外へ広がる為、詳しいことは分からないが土坑又溝と考えられる。東西0.9ｍ、南北不明、深さ0.4ｍである。掘形は、薬研掘り状である。埋土は暗灰色土で、遺物は出土しなかった。

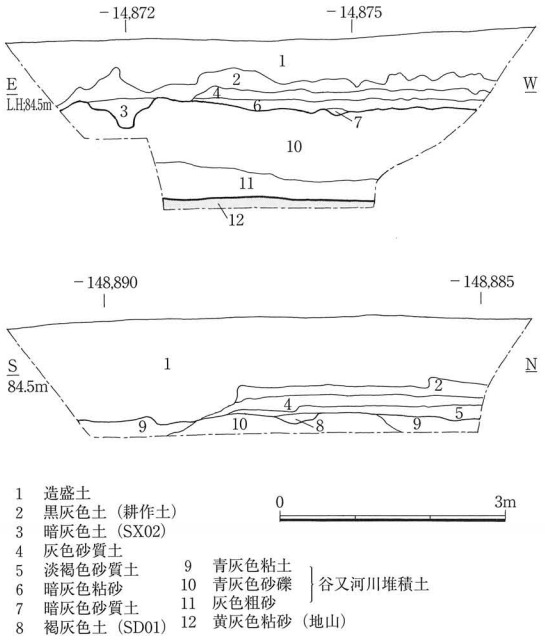
今回の調査では、これまでの付近の調査で検出例がない７世紀後半以降の遺構が存在することが分かった。

また、調査地北東の市ＦＳ第２次調査区の黄褐色粘砂（地山）上面の標高は84.7ｍであり、今回の第２発掘区黄褐色粘砂（地山）上面の標高が82.7ｍで比較すると比高差が２ｍとなる。標高が低い今回の調査区内では、黄褐色粘砂（地山）上に青灰色粘土・青灰色砂礫・灰色粗砂が堆積していたが、標高の高い市ＦＳ第２次調査区では、これらの土層が堆積していなかった。

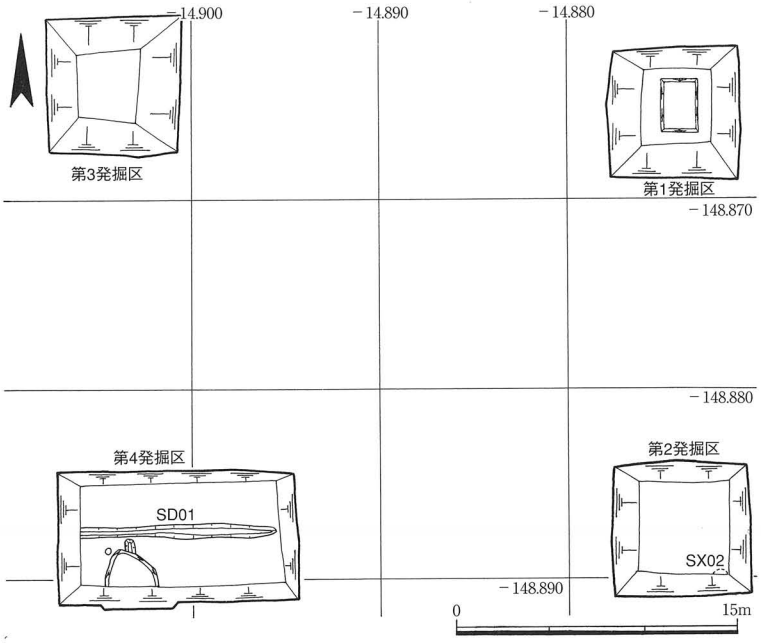
このことから、谷又河川が形成され、そこに流れ込んだ土砂が青灰色粘土・青灰色砂礫・灰色粗砂であると考えられる。青灰色粘土・青灰色砂礫・灰色粗砂から遺物が出土せず、時期は決めがたいが、青灰色砂礫上面において７世紀後半の遺物含む溝ＳＤ01が掘られおり、少なくともこれ以前に堆積したことが分かる。　（秋山成人）



第６次調査　第１発掘区東壁土層図　1/100



第２発掘区南壁・第４発掘区西壁土層図　1/100



遺構平面図　1/400

第１発掘区全景（北から）

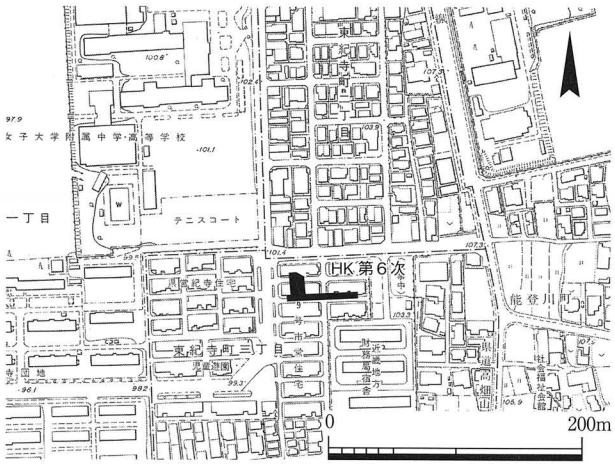
第２発掘区全景（南から）

第３発掘区全景（北から）

第４発掘区全景（北西から）

26. 東紀寺遺跡の調査　第６次

調査次数	ＨＫ第６次	調査期間	平成15年11月21日～12月26日
事業名	第９号市営住宅建替事業	調査面積	402㎡
通知者名	奈良市長	調査担当者	秋山成人
調査地	奈良市東紀寺町三丁目707		



第６次調査　発掘区位置図　1/6,000

Ⅰ．はじめに

調査地は、春日山西側の扇状地の扇央部で、現在の能登川北岸に位置し古墳時代の集落遺跡とされる東紀寺遺跡の南東部にあたる。これまでの調査には、平城京左京五条七坊十三坪の調査（市HK第243次・平成３年度）、奈良女子大学付属中学校・高等学校構内遺跡の調査（国第240次・平成４年度）、調査地に隣接して西側で、県営紀寺団地建替に係る調査（県・平成８年度、県・平成10年度）、さらに南西側で、都市基盤整備公団紀寺団地建替に係る調査（県･平成13年度）があり、古墳時代中期の古墳、古墳時代及び奈良時代の遺物を含む河川跡・土坑、中世から近世の土坑、時期不明の掘立柱建物が検出されている。調査地の南側では、第９号（紀寺）市営住宅建替事業に係る調査（市HK第５次・平成13年度）があり、古墳時代後期の掘立柱建物・溝、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱列、平安時代以降の溝、近世の土坑を検出した。今回の調査は、これまでの調査成果をふまえ東紀寺遺跡の範囲確認と遺跡内の様相を明らかにすることを目的に調査を行った。

Ⅱ．検出遺構

発掘区の層序は、上から造成土、黒灰色砂質土、淡灰色砂質土、暗黄灰色土の順で地表下約2.0mで黄灰色土の地山に至る。地山上面の標高は、発掘区北西隅で100.1m。遺構は、黄灰色粘土の地山上面で検出した。遺構には、中世以降の粘土採掘坑、杭列の他、河川跡がある。

河川01は地山上面で検出した発掘区のほぼ全域に広がる河川跡で北東から南西方向に流れる。河川跡の北西岸は検出したが、南東岸は発掘区外に広がる。長さ11m以上、幅約30m以上、深さ1.1m以上ある。埋土は、河川の北西岸付近で、上から灰色土、暗灰色土、灰色粗砂、褐色土、赤褐色土、灰色砂が続く。発掘区の東側では、灰色土は西へわずかに下降しながら厚みを増しており、その下に暗灰色砂礫が認められる。地表下2.1mまで掘り下げたが危険を伴い掘削を断念した為、川底を確認することは出来なかった。出土遺物には、褐色土及び赤褐色土から出土した古墳時代中期の土師器・須恵器・製塩土器・木製品・部材、自然木、灰色粗砂から出土した古墳時代中期から後期の土師器・須恵器・製塩土器、暗灰色土及び灰色土から出土した古墳時代後期の土師器・須恵器・製塩土器、奈良・平安時代の土師器がある。

ＳＸ02は、河川01埋土の褐色土に打ち込まれ東西方向に長さ14.8m以上の杭列である。0.4～1.1mの間隔で９本残っており、角材・細長い板材（一辺６～８㎝、長さ34～52㎝）、丸木材（径６㎝、長さ46㎝）などがあり、建築部材を転用し先を尖らせて利用している。この杭列の南側に沿って長さ14.8m以上、幅1.0m、深さ0.12mの溝状遺構がある。埋土には灰色粗砂が堆積している。遺物は、古墳時代中期から後期の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

土坑群は、発掘区北西隅の河川01北西岸部の黄灰色土（地山）上面で検出した。掘形の平面は不定形である。規模は、径1.2～2.0m、深さ0.3～0.4mで、連続して掘削されており、粘土採掘坑と考えられる。埋土は暗黄灰色土で、遺物には土師器・須恵器があるが小片のため詳しい時期は分からない。重複関係から河川01より新しい。

Ⅲ．出土遺物

遺物整理箱に19箱分の土器、39箱分の木製品が出土。遺物の大半が河川01内堆積土の灰色土、暗灰色土、褐色土から出土したもので、古墳時代中期・後期の土師器、須恵器、製塩土器、木製品が大半である。　（秋山成人）

土師器・須恵器　河川01の褐色土や赤褐色土から出土した古墳時代中期後半の土器には、田辺編年のＴＫ

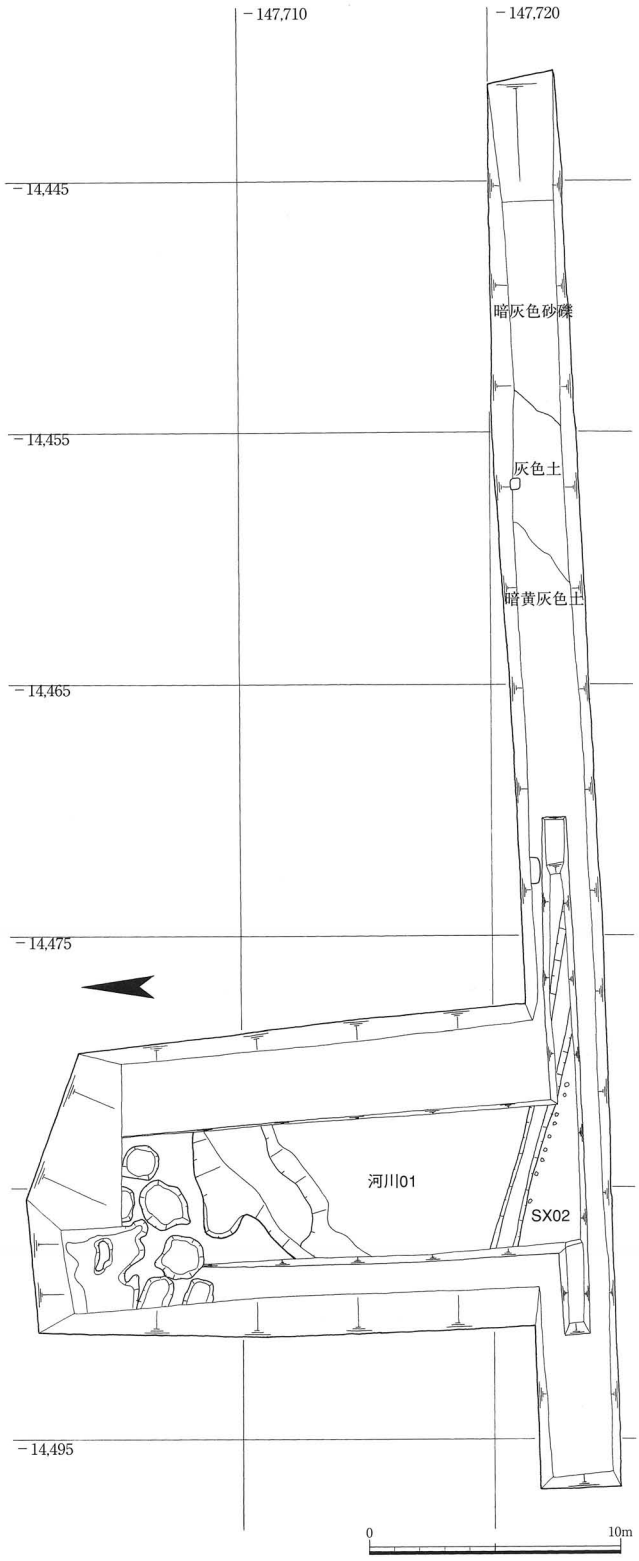
208型式及びＴＫ23型式の様相を示す須恵器杯蓋（１・４）、杯身（２）・高杯（３・６）・器台・鼈（７）・甕（８）と布留式の最新段階の特徴を示すミニチュアの土師器壷(12)・甕（９・10）・高杯（13・14）・鉢（15・16）・鍋・甑・手づくね土器（11）・製塩土器がある。須恵器鼈（７）は、体部内面に煤が付着している。内部には、天然樹脂状物質が入っていた。顕微赤外分析を行った結果、琥珀(樹脂の化石)、コパール、ダンマン、ロジン（松脂）等に比較的類似したスペクトルを示した。河川01の灰色土や暗灰色土から出土した古墳時代後期後半の土器には、田辺編年ＴＫ43型式及びＴＫ209型式の須恵器杯蓋・杯身(５)、甕がある。ＳＸ02灰色粗砂から出土した古墳時代中期末から後期初頭にかけての土器には、田辺編年ＴＫ47型式の杯身やＭＴ15型式の杯蓋がある。　（安井宣也）

製塩土器　河川01及びＳＸ02から出土。出土破片総数403点のうち口縁部破片総数122点、総重量935.3ｇ。大半が細片である。焼成は硬質、胎土も精緻である。これらは、形態的な特徴と製作技法によって分類できる。形態は、丸底で長胴になる筒形のもの（Ａ）と丸底で鉢形になるもの（Ｂ）がある。さらに内外面に製作技法に違いがみられ、外面：胴部外面にタタキの痕跡が残るもの（１）、胴部外面に指押えとナデのもの（２）、内面：指押えとナデのもの（ａ）、貝殻の腹縁で調整した後ナデのもの（ｂ）、ハケ目痕跡が残るもの（ｃ）に分けることができる。以下、これらの組合せにより分類する。

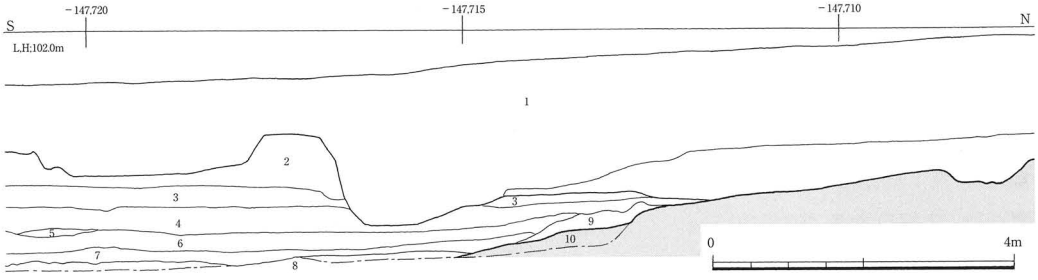
Ａ－１ａ　17～21は河川01の褐色土出土の筒形の製塩土器の体部である。製作技法は、外面横方向のタタキ、内面指押えと縦位のナデ。色調は赤褐色又は茶灰色。器壁の厚さ1～3㎜。出土破片数39点のうち口縁部破片数5点、重量79.2ｇ。

Ａ－１ｂ　22・23は河川01の暗灰色土出土の筒形の製塩土器の体部である。製作技法は、外面に横方向のタタキ、内面貝殻腹縁調整の後ナデ。色調は淡赤灰色。口径は口縁が残っておらず不明。器壁の厚さ２㎜。出土破片数２点、重量6.4ｇ。

Ａ－１ｃ　24は河川01の褐色土出土の筒形の製塩土器体部から口縁部である。製作技法は、外面が横方向の

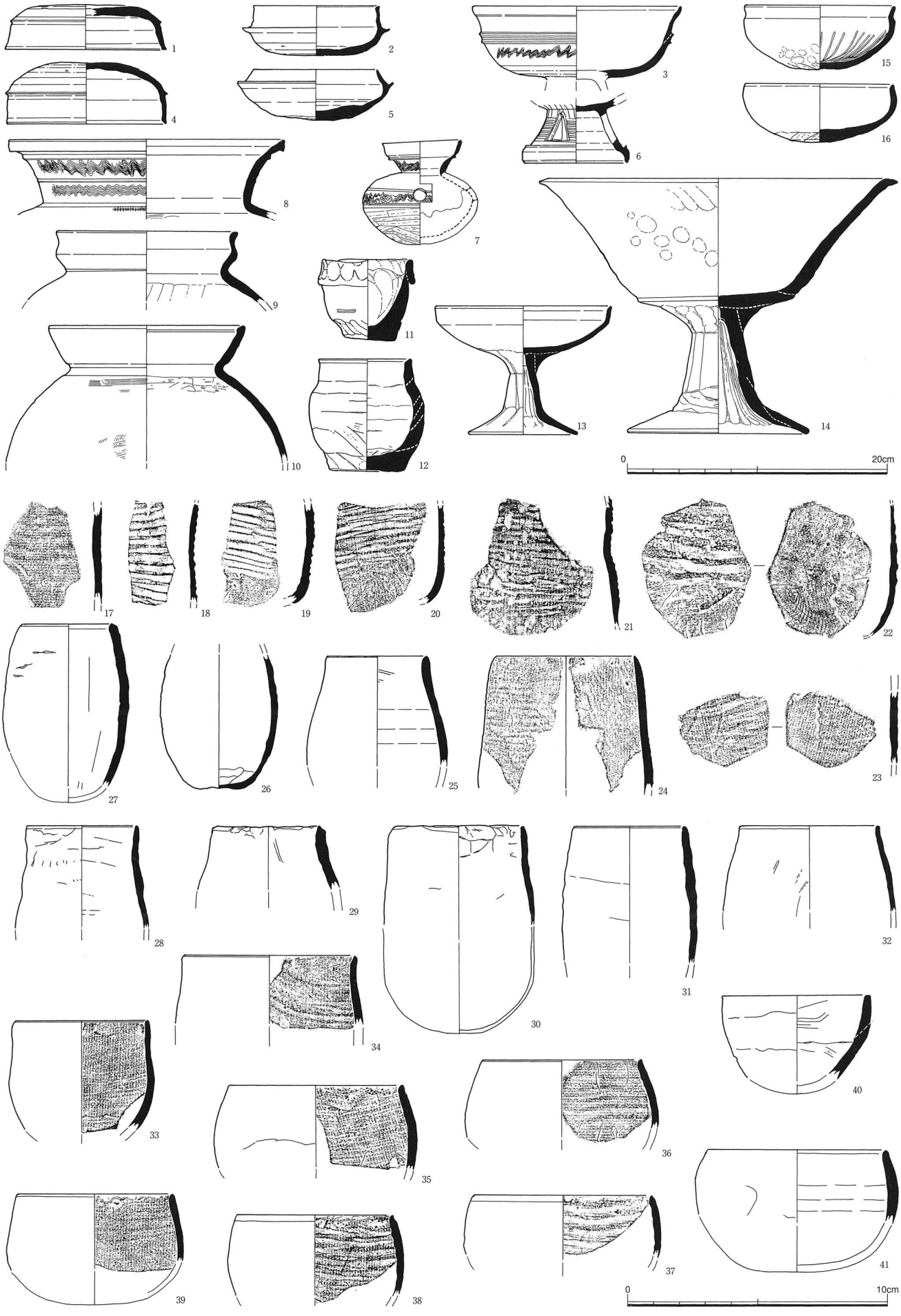


第６次調査　遺構平面図　1/300



1　造成土
2　暗黄灰色土
3　灰色土（河川01）
4　暗灰色土（河川01）
5　灰色粗砂（SX02）
6　褐色土（河川01）
7　赤褐色土（河川01）
8　灰色砂（河川01）
9　暗青灰色粗砂（河川01）
10　黄灰色土（地山）

第６次調査　発掘区西壁土層図　1/100



出土土器（1～16：1/4、17～41：1/8）

タタキ、内面は斜め方向のハケ。色調は淡赤褐色。器壁の厚さ0.2～0.3㎜。出土破片数２点のうち口縁部破片数1点、重量8.7ｇ

Ａ－２ａ　25～32は河川01の褐色土出土の筒形の製塩土器の体部から口縁部である。製作技法は、外面ナデ、内面ナデで、爪跡が残るものもある。色調は赤灰色。口径４～5.5cm。器壁の厚さ1.5～３㎜。出土破片数267点の内口縁部破片数81点、重量602.2ｇ。

Ａ－２ｂ　33・34は河川01の褐色土出土の筒形の製塩土器の体部である。製作技法は、外面ナデ、内面貝殻腹縁調整後ナデ。色調は黄白色。口径6.5cm。器壁の厚さ３㎜。出土破片数4点の内口縁部破片数1点、重量5.1ｇ

Ｂ―２ａ　40・41は溝ＳＤ02灰色粗砂出土の鉢形の製塩土器の体部から口縁部である。製作技法は、内外面ともナデ、粘土紐接合痕跡が残る。40は色調が赤褐色。口径5.5cm。器壁の厚さ3.5㎜。41は色調が淡黄灰色。口径7.8㎜。器壁の厚さ４㎜。出土破片数13点、この内口縁部破片数6点、重量45.1ｇ

Ｂ－２ｂ　35～39は褐色土出土の鉢形の製塩土器体部から口縁部である。製作技法は、外面ナデ、貝殻復縁調整を施した後ナデ。色調は黄白色。口径５～6.5cm。器壁の厚さ２～３㎜である。出土破片数20点の内口縁部破片数14点、重量89.7ｇ。

その他、褐色土及び灰色粗砂出土のＡ－２ｂ又Ｂ－２ｂのものが出土破片数56点の内口縁部破片数14点ある。重量は98.9gである。

分類別出土量は、Ａ－２ａ（筒形丸底、内外面ナデ）が他に比べ多いことが分かる。東紀寺遺跡は内陸部に立地しており、海岸部から製塩土器が運び込まれたと考えられる。また、今回出土した製塩土器は、Ａ－１ａ・ｂ・ｃが香川県直島町喜兵衛島南東浜遺跡、坂出市櫃石島大浦浜遺跡などの備讃瀬戸周辺、Ａ－２ａ・ｂが大阪府岬町小島東遺跡などの大阪湾周辺、Ｂ－２ａが兵庫県北淡町貴船神社遺跡、浜田遺跡など、Ｂ－２ｂが和歌山市西庄遺跡などの紀淡海峡周辺で出土のものに類似する。

木製品　大半が河川01埋土の褐色土から出土した。出土総数約200点ある。木製品の種類には、農具・工具・武器・食事具・祭祀具・紡織具・雑具・部材等がある。

なお、以下で記す＜･･･cm＞の表示は、残存部の計測値を表す。

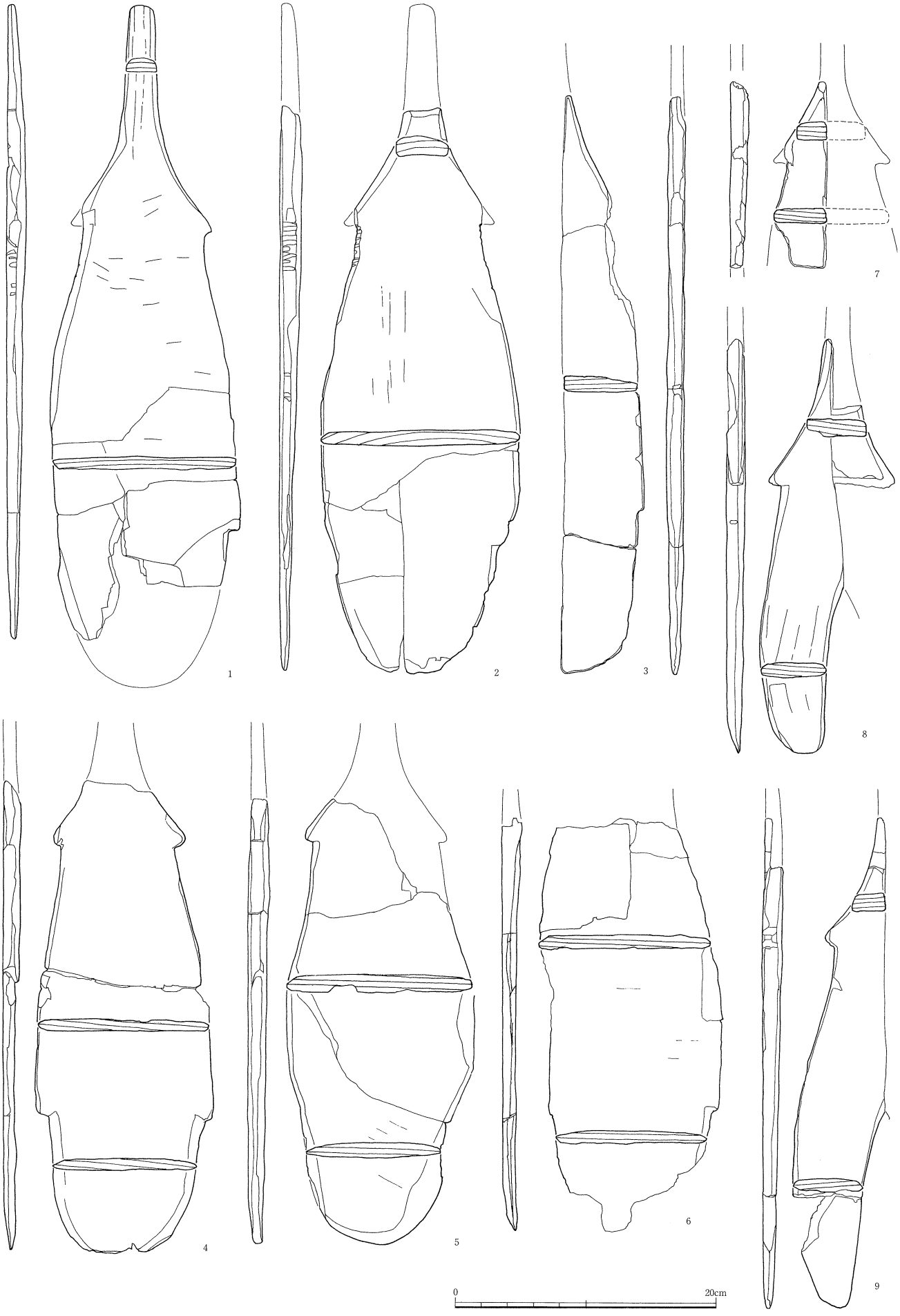
農具　曲柄平鍬１～７　いずれも鉄製Ｕ字形刃先が装着される鍬である。柄は紐で縛るために平面が笠形をなし、笠の下のくびれから刃部へ徐々に幅広になる。１～４は刃部中央付近で最大幅となる。５は笠の下のくびれが外彎した後、屈曲して刃縁へ徐々に幅が狭くなる。１は長さ<48.4cm>、刃部長31.1cm、刃部幅14.2cm、笠幅<9.9cm>、軸部厚1.3cm。２は長さ<43.2cm>、刃部長さ<34.2cm>、刃部幅15.3cm、笠最大幅<9.8cm>、軸部厚1.7cm。３は長さ<44.1cm>、刃部長<36.2cm>、刃部幅<6.2cm>、笠幅<3.8cm>、軸部厚1.3cm。４は長さ<36.1cm>、刃部長31.9cm、刃部幅13.7cm、笠幅10.1cm、軸部厚1.3cm。５は長さ<34cm>、刃部長さ31.1cm、刃部幅14.4cm、笠幅6.3cm、軸部厚1.3cm。６は長さ<31.6cm>、刃部幅<13.1cm>。７は長さ<14.2cm>、刃部幅＜４cm＞、笠幅<3.3cm>、軸部厚1.5cm。樹種はいずれもコナラ属アカガシ亜属。

曲柄又鍬８・９・10　紐で縛るために平面笠形をし、笠の下のくびれから刃部へ外彎、徐々に幅広となり、刃部中央付近で二又に分かれる。８・９は刃部中央やや下で最大幅になる。二又に分かれた部分から刃縁までの長さは、刃部の長さのほぼ1/2である。10はくびれが外彎した後、真直ぐに細長くのびる。８は長さ<31.6cm>、刃部長20.8cm、刃部幅<6.5cm>、笠幅9.7cm、軸部厚1.3cm。９は長さ<37.5cm>、刃部長28.4cm、刃部幅<5.5cm>、笠幅4.6cm、軸部厚1.4cm。10は長さ<24.2cm>、刃部幅9.4cm。樹種はいずれもコナラ属アカガシ亜属。

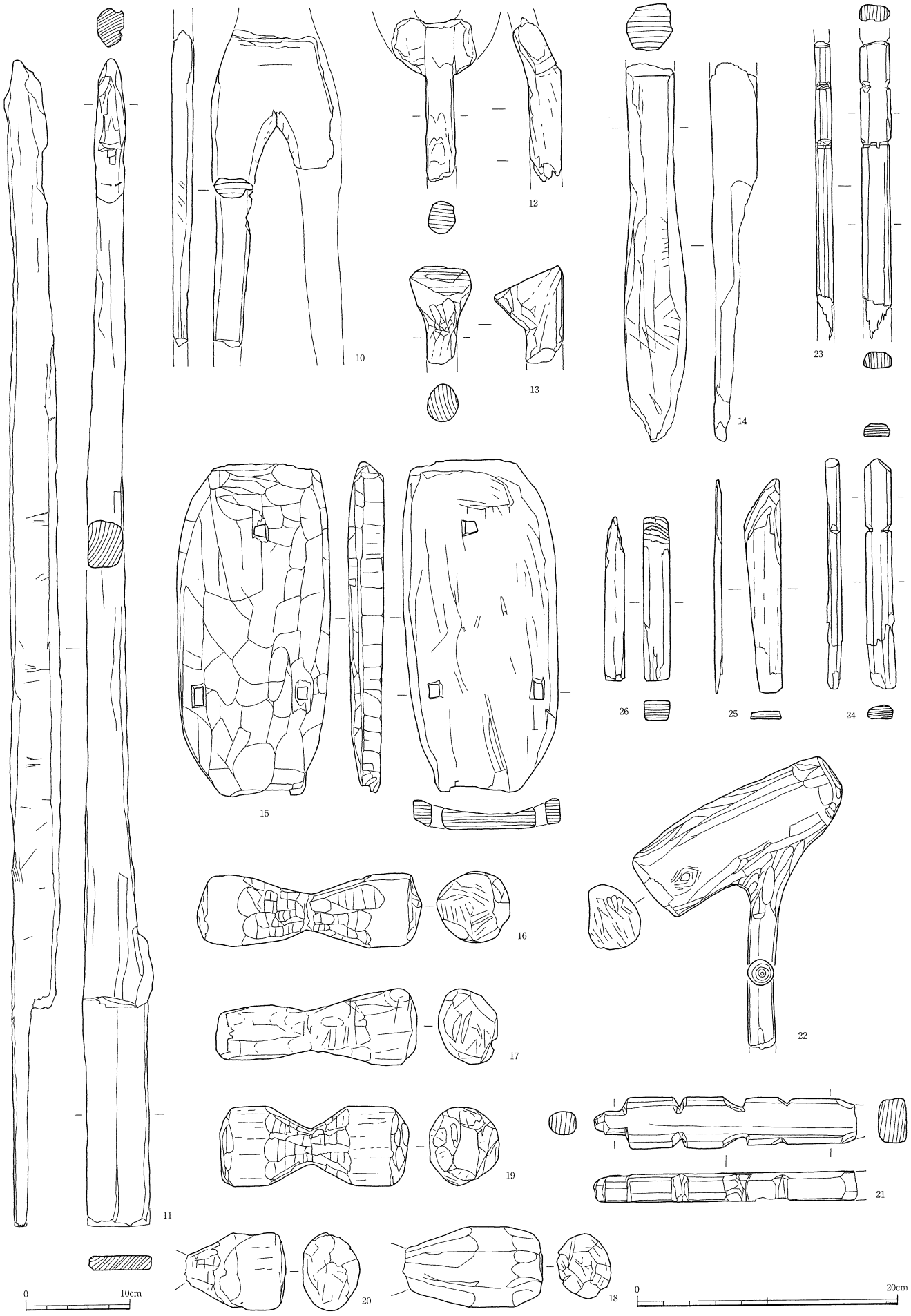
柄11～14　11は柄の端が削り込まれ突起形をなし、両側面は先端へと方形になり、頭部先端が切り込まれ装着面をなす。12・13は柄の端に把手が付く。把手は12が逆半円形、13が「く」の字形である。14は先端から側面にかけ焼け焦げている。幅が柄の上の部分より平たくなり広がっている。12・13・14は残存状態が悪くわかりにくいが11は組合式の鋤柄と思われる。12は鋤柄、13は鍬又は鎌柄と思われる。14は鋤柄又は漁労具の櫂の可能性もある。11は長さ<113.8cm>、切込み長<20.9cm>、切込み幅6.3cm、切込み厚1.8cm、握り中央幅3.5cm、握り中央厚4.5cm。12は長さ<12.6>cm、把手幅<4.7cm>、把手厚2.3cm、柄幅2.0cm、柄厚2.5cm。13長さ<7.5cm>、把手幅4.7cm、把手厚5.3cm、柄幅2.3cm、柄厚2.9cm。14は長さ<29cm>、柄幅3.5cm、柄厚3.5cm先端幅<4.8cm>、先端中央厚1.5cm。樹種は11がヒノキ科、12・13がコナラ属アカガシ亜属、14がスギ。

田下駄15　縦長田下駄で、鼻緒を通した孔が３箇所ある。外縁は内彎する。削った跡が良く残る。長さ25.4cm、幅11.8ｃｍ、厚さ1.1cm。樹種はヒノキ。

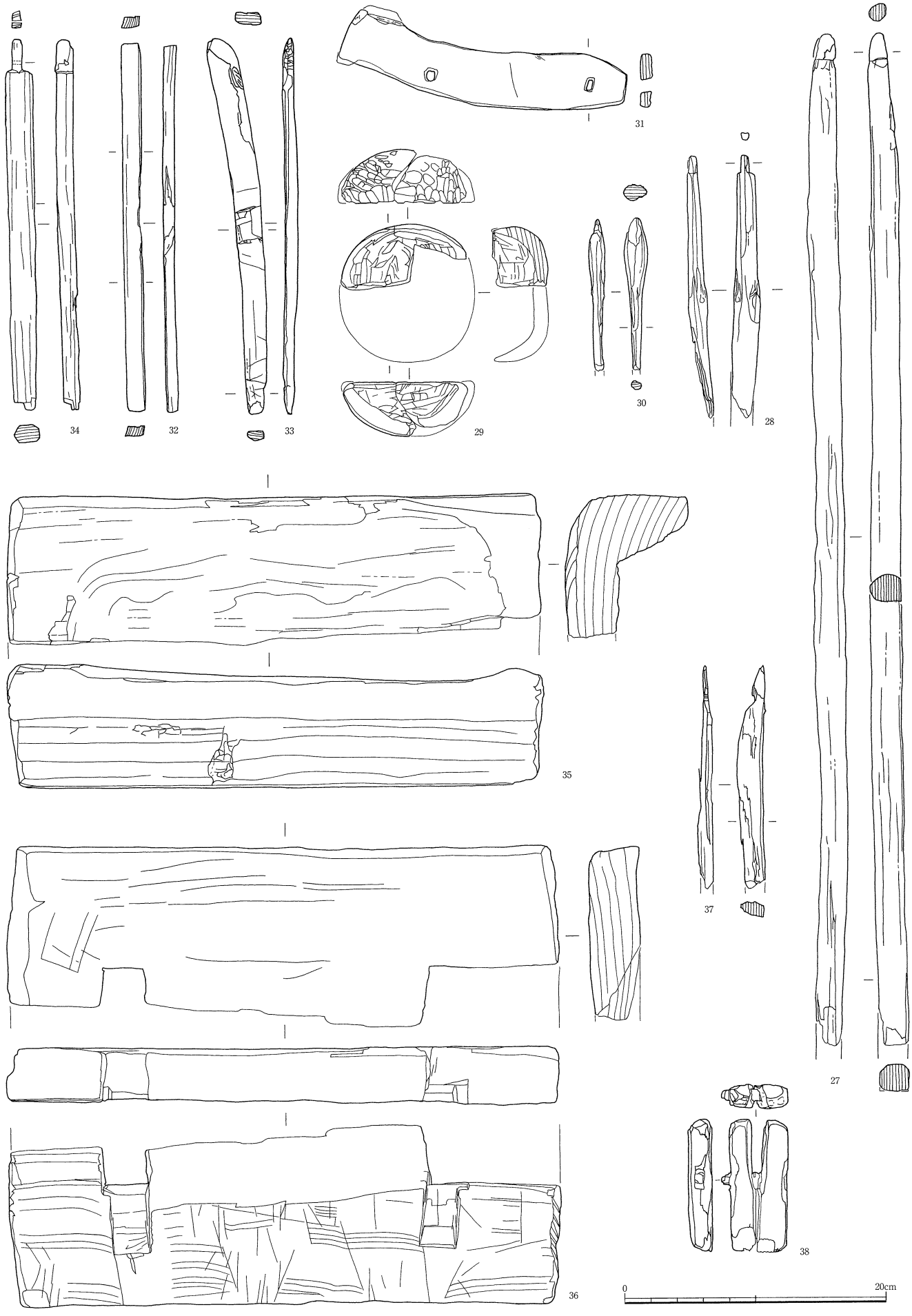
工具　木錘16～20　芯持材を側面から中心に向けて斜めに深く削り込み、両端面も丸く削っている。16～18は、側面中央の削り込みの角度が小さく、細長い形である。19・20は、中央の削り込みの角度が大きく鼓形である。16は長さ17.2cm、径5.5cm。17は長さ15.4cm、



河川01出土木製品　1/4



河川 01 出土木製品　1/4（11 のみ 1/5）



河川 01 出土木製品　1/4

径5.8×3.2cm。18は長さ<10.7cm>、径4.9cm。19は長さ14.5cm、径6.1cm。20は長さ<7.2cm>、径5.9cm。樹種は16がヤブツバキ、17がコナラ属アカガシ亜族、18がサカキ、19·20がコナラ属アカガシ亜属。

編台目盛板21　断面長方形で、側面角が面取りされている。両側に目盛とされるV字の切れ込みが2対ある。棒の端には枘があることから固定されたことが分かる。長さ<20cm>、幅3.9cm、厚さ2.1cm。枘は、長さ2.4cm、幅1.8cm、厚さ2.1cm。樹種はヒノキ。

斧柄22　一木で作られた膝柄の未製品で、斧台が加工されていないことから横杵とも考えられるが、着柄角度が鋭角であることから鉄斧の柄の未製品である可能性が高いと考えられる。長さ<22.9cm>、斧台長さ16.8cm、斧台径5.2cm、握り径2cm。樹種はサカキ。

武器　弓27・28　27は弓幹がほとんど彎曲せず真直ぐである。先端には、切り込まれた弭が見られる。棒樋は、刻まれていない。弓幹の一方は欠損している。28は弓幹の先端部付近が残る。先端部に、両側から切り込まれた弭がみられる。27は長さ<77.6cm>、弓幹幅2.4cm。弓幹厚2.2cm。28は長さ<20.3cm>、弓幹幅2.1cm、弓幹厚2.5cm。樹種は27がヒノキ、28カヤ。

食事具　椀29　口径<9.6cm>、高さ4.2cm。全体の1/2以上が欠損しているが、その大きさから杓子の可能性もある。樹種はエゴノキ属。

祭祀具　矢形30　矢尻と矢柄を一木で削り表現している。矢尻は断面楕円形で、矢柄は細く伸び、断面円形である。矢柄の一部が欠損している。長さ<11.7cm>、矢尻幅1.8cm、矢尻厚さ1.3cm、矢柄径0.8cm。樹種はヒノキ。

馬形31　板材の側面に頭、胴、尻を切り込んで表現している。胴部には脚を装着するための孔が前後に2ヶ所ある。長さ22cm、幅4.2cm、厚さ1cm。樹種はヒノキ。

刀形・刀子形25・33　25は薄い板材の先端を削って刃部を表現している。33は刃部と茎を表現している。刃部は、先端へ向かって背側に彎曲し、先端は丸くなっている。茎の先端は細く削られている。表面には直線文の線刻が見られる。25は長さ16.4cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm。33は長さ28.7cm、幅2cm、厚さ0.9cm、茎の長さ2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.8cm。樹種は、25・33がヒノキ。

紡織具　杼34　杼の支え木と考えられ、一方の端部には枘があり、枘に孔が穿たれている。腕木の枘孔に差込んだ際、枘と枘孔が固定され抜けないよう栓を差込んだ跡が残る。もう一方は欠損している。長さ<28.4cm>、幅2cm、厚さ1.3cm。枘の長さ2.4cm、幅0.7cm、厚さ1.3cm。樹種はヒノキ。

雑具　腰掛35・36　35は刳物腰掛で、座板と脚の1/2が残存。平面長方形で座板上面を浅く刳抜き窪んでいる。脚は長方形で座板側面から同じ長さで連がっている。36は指物腰掛の座板で。平面長方形で、脚を装着する枘孔が2ヶ所ある。枘孔は刳り抜かれ、座板下面で長方形、座板上面で方形をなす。35は長さ41cm、幅11.2cm、高さ9.6cm。36は長さ42.2cm、幅<13cm>、厚さ3.9cm。樹種は35がモミ属、36がヒノキ。

その他　23·24·26·32·37·38　23·24は平面長方形、断面長方形で、側面角が面取りされ、両側にV字に切れ込みが入る。23は両端が欠損。24は片一方の先端が残っており端面は山型に削られている。26は平面長方形で、先端が両側から斜めに削られ、後端は面をなす。32はほぼ完形で、平面長方形。片側面の幅が一方の側面より広い。37は板材で片側端部近くに切込みが入り、先端が尖っている。38は方形の二つの部材を連結させるため側面に孔を穿ち、栓が差込まれている。部材の先端は丸く削られ、もう一方は欠損している。23は長さ<22.3cm>、幅2.3cm、厚さ1.3cm。24は長さ17.6cm、幅2cm、厚さ1cm。26は長さ12.6cm、幅2cm、厚さ1.5cm。32は長さ28.2cm、幅1.3cm、厚さ0.8cm。37は長さ17.2cm、幅2cm、厚さ1.2cm。38は長さ10.2cm、幅4.4cm、厚さ1.8cm、栓は、長さ4.8cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm。樹種は23・24・26・32・37がヒノキ、38がツブラジイ（本体）、ヒノキ（栓）。

Ⅳ．まとめ

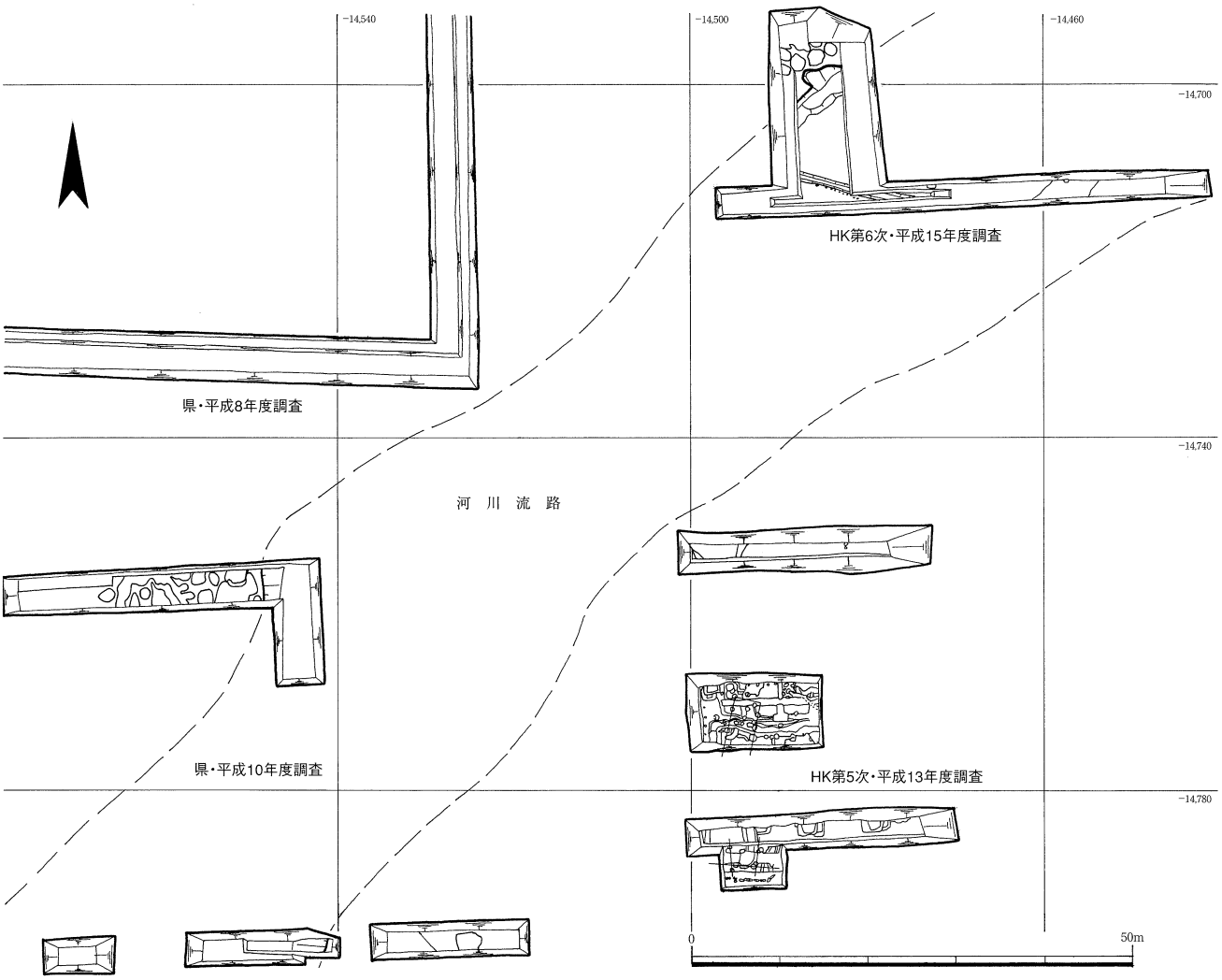
東紀寺遺跡の調査成果をまとめると次のようになる。

1　河川01は、北東から南西方向に流れ、県・平成10·13年度調査で検出した河川跡につながる可能性がある。河川の幅は約30m以上あり、現在の調査地の南側約150mを東から西に流れる能登川（幅約15m）と比較するならば、かなり広い河川であることが分かる。

2　河川01から約200点に及ぶ木製品、多くの自然木が出土した。木製品には、農具・工具・武器・食事具・祭祀具・紡織具・雑具・部材といった多種類のものがあり、古墳時代中期から後期にかけての生活用具を考える上で重要な一括資料を得ることが出来た。

3　河川01の褐色土から出土した須恵器甕内の天然樹脂状物質は分析結果によると、琥珀（樹脂の化石）、コパール、ダンマン、ロジン（松脂）に類似したものである可能性が大きいことが判明した。天然樹脂状物質は、縄文時代から装飾品以外にも各種多目的に使用され、香や線香（蚊いぶし）として使われていたことも知られ、利用方法を考える上で貴重な資料である。

4　河川01から製塩土器がまとまって出土した。製塩土器は、形態的な特徴と製作技法により分類でき、生産遺跡の出土遺物と比較することにより、幾つかの生産



河川復元図　1/800

地から搬入したものであることが分かる。このことは、天理市布留遺跡、小路遺跡及び御所市南郷大東遺跡で発見された製塩土器の出土状況とよく似た傾向で、内陸部での古墳時代中・後期の製塩土器流通を考える上で貴重な成果である。

5　今回の調査で多量の遺物が出土したことにより、古墳時代の集落が、調査地周辺で発見される可能性が大きくなったことも成果の1つである。今後、調査成果の蓄積により集落の様相が明らかになると考える。

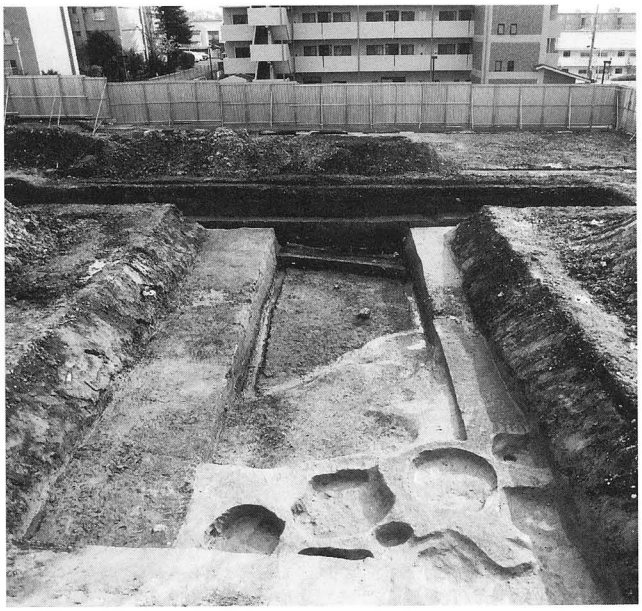
（秋山成人）

＊　木製品の樹種同定は奈良教育大学金原正明氏、古環境研究所の結果に基づくもので、詳細は平成16年度概要報告書で報告する。
須恵器甕内容物に関する調査分析は奈良文化財研究所降幡順子氏、佐藤昌憲氏の結果に基づくもので、詳細は平成16年度概要報告書で報告する。

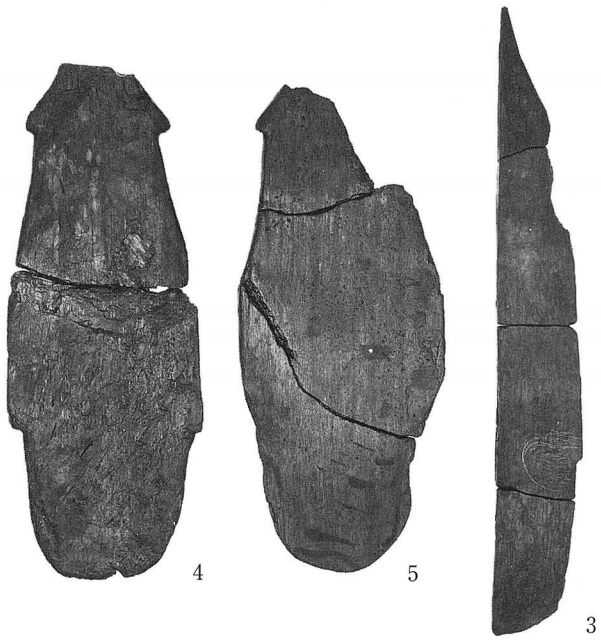
1）上原真人編『木器集成図録近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料第36冊　1993
2）大山真充 真鍋昌広「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』香川県教育委員会　1988
3）橿原考古学研究所「南郷遺跡群Ⅲ」奈良県立橿原考古学研究所調査報告第74冊 奈良県教育委員会　2003
4）木下晴一 伊藤宏幸 渡辺 昇「貴船神社遺跡」『兵庫県文化財調査報告219冊』兵庫県教育委員会　2001
5）小池 寛「古墳時代中期における製塩土器研究の現状と課題」『京都府埋蔵文化財情報弟86号』財団法人京都府埋蔵文化財調査センター　2002
6）近藤義郎『土器製塩の研究』株式会社青木書店　1984
7）近藤義郎編『日本土器製塩研究』株式会社青木書店　1994
8）田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
9）天理参考館分室「布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書」埋蔵文化財天理教調査団　1995
10）天理市教育委員会『星塚・小道遺跡の調査』天理市埋蔵文化財調査報告第4集　1990
11）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成13年度』奈良市教育委員会　2004
12）板 請「東紀寺遺跡」『奈良県遺跡調査概報（第1分冊）1998年度』奈良県立橿原考古学研究所　1999
13）広瀬和夫「小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会　1978
14）兵庫県教育委員会社会教育・文化財課「製塩遺跡Ⅰ（津名群）」兵庫県生産遺跡調査報告第2冊 兵庫県教育委員会　2001
15）冨加見康彦他「西庄遺跡」『都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター　2003
16）水野敏典 宮長秀和「東紀寺遺跡」『奈良県遺跡調査概報（第1分冊）2001年度』奈良県立橿原考古学研究所　2002
17）毛利光用子 高野政昭 日野 宏『布留遺跡（西小路）地区古墳時代の遺構と遺物』埋蔵文化財天理教調査団　1996
18）本村充保「東紀寺遺跡」『奈良県遺跡調査概報（第1分冊）1996年度』奈良県立橿原考古学研究所　1997

発掘区全景（西から）

河川 01 木製品出土状況（南から）

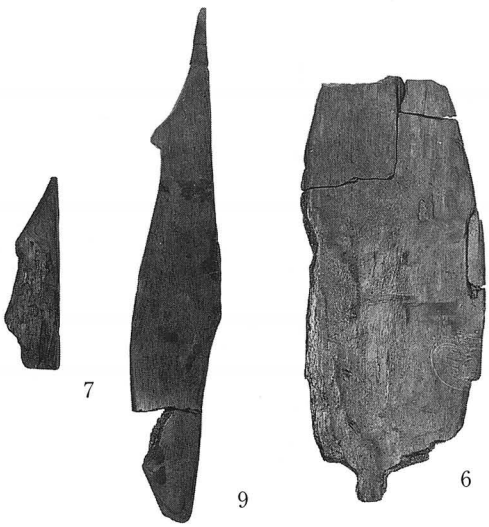


発掘区西半全景（北から）

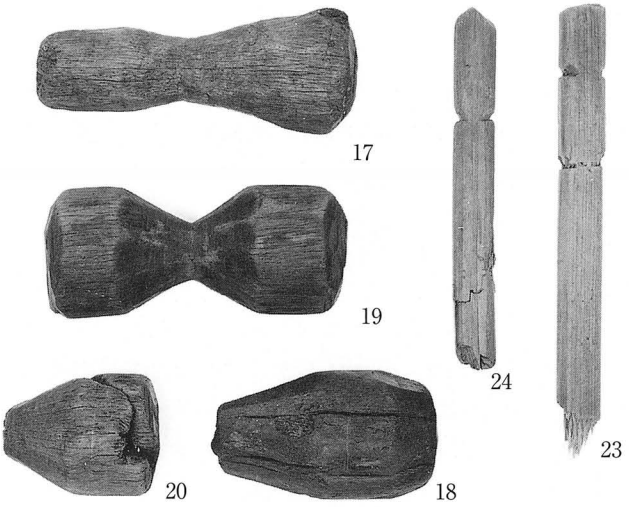


曲柄平鍬

発掘区西東半全景（南東から）

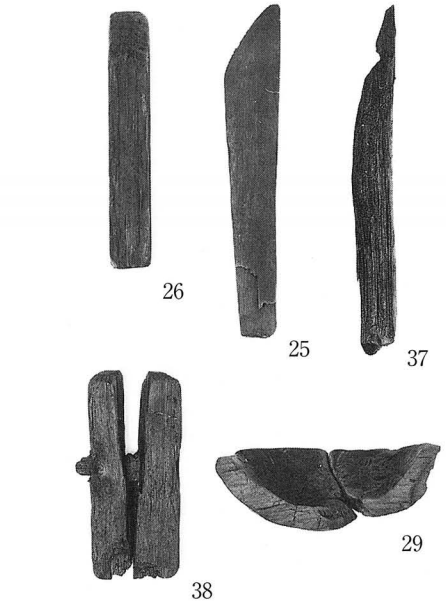


7 曲柄平鍬又は又鍬　9 曲柄平又鍬　6 曲柄平鍬



17 ～ 20 木錘　23・24 用途不明品

矢形



25 刀形又は刀子形　26・32・37・38 用途不明品　34 垜の支之木　29 椀

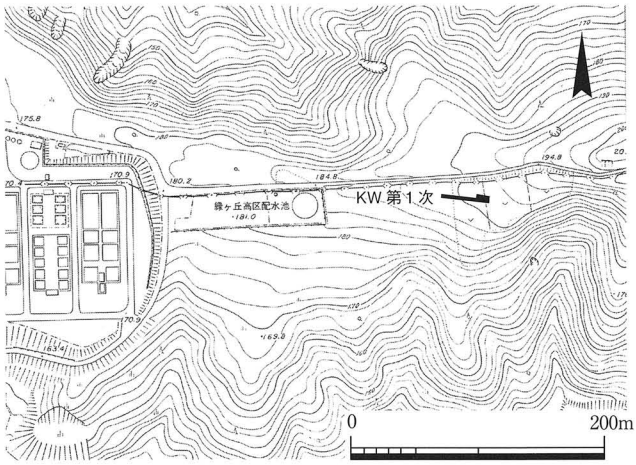
刀形又は刀子形

35 刳物腰掛　36 指物腰掛

27 弓　11 柄

27. 川上町遺物散布地の調査

調査次数	KW 第1次	調 査 期 間	平成16年２月２日～２月17日
事 業 名	道路新設工事奈良阪川上線	調 査 面 積	188㎡
通知者名	奈良市長	調査担当者	秋山成人
調 査 地	奈良市川上町897－8、897－9		



第１次調査　発掘区位置図　1/6,000

調査地は、奈良市と京都府相楽郡木津町との境界に接する。調査地の北側隣接地には、東西に延びる尾根上に旧街道が残っており、古くから大和と山城・近江・伊賀への要衝である。また、調査地から東へ進むと現在廃寺となっている中川寺（成身院 天永三年（1112年）建立）がある。今回の調査地は、京都府遺跡地図第5分冊によると、昭和44・45年に京都府教育委員会が行った分布調査で鎌倉時代の布目瓦が採取され「平野瓦窯跡」として掲載されているが、位置がはっきりしていない。また、史料には、「平野」がその名のとおり平らな場所で、正長元年（1473年）に山城の土一揆の集結地となり、文明十三（1486年）に平野の辻堂で中川寺の復興のための猿楽が催されたことが記されている。

周辺の調査では、調査地の北約50mのところで携帯電話基地局建設に伴う発掘調査（木津町・平成9年度）が行われている。遺構は検出されず、土師器・須恵器の小片数点が出土している。また、調査地の西230mのところに鎌倉時代の土師器が採取されている奈良阪町遺物散布地が広がる。ここでは、野球場建設に伴う発掘調査（市 NZ 第1次・平成２年度）が行われたが、遺構は検出されず。遺物は土器の小片・サヌカイト片数点が出土している。以上のことから、瓦窯跡の有無確認及び、周辺地域の様相を明らかにするため調査を行った。

発掘区の基本的な層序は、上から暗灰色土、暗赤褐色土、黄褐色土の順で、現地表下0.2～0.4mで赤灰色粘質土の地山に至る。発掘区西半では、黄褐色土の上に黄灰色土が約0.2m堆積している。遺構は、地山上面で検出した。遺構検出面の標高は、発掘区東半で189.75m、発掘区西半で187.25m、東から西へ下降する。

検出遺構には、時期不明の掘立柱列、土坑がある。

SA01は、発掘区中央東よりで検出した南北１間の柱列で、柱間寸法は3.3mである。柱穴は、平面楕円形掘形で、地山から垂直に掘り込まれ、柱抜取り痕跡を残す。規模は、長径0.95～1.1m、短径0.76～0.9m、深さ0.6～0.76mである。これに続く北または南に延びる柱穴は検出されなかったことから建物にはならない。遺物が出土せず、時期は不明である。

SK02は、発掘区東半で検出した平面不整形掘形の土坑で、ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平らである。規模は、長径0.9m、短径0.66m、深さ0.65mである。埋土は黄褐色土で、遺物が出土せず、時期は不明である。

SK03は、発掘区南壁沿いで検出した発掘区外南へ広がる平面不定形掘形の土坑で、掘形の断面形はＵ字形である。規模は、東西2.9m、南北2.0m以上、深さ0.8mである。埋土は黄褐色土で、遺物が出土せず時期は不明である。

SK04～07は、発掘区東半で東西方向に並ぶ平面不整形掘形の土坑がある。ほぼ一列に並ぶものの、底は浅く起伏があり均一でなく、柱抜取り痕跡もないことから掘立柱列と考えにくい。規模は、SK04・06・07で、長径1.2～1.35m、短径0.7～0.85m、深さ0.25～0.36m、SK05で長径２　m、短径0.9m、深さ0.30mである。埋土は黄褐色土である。遺物が出土せず時期は不明である。

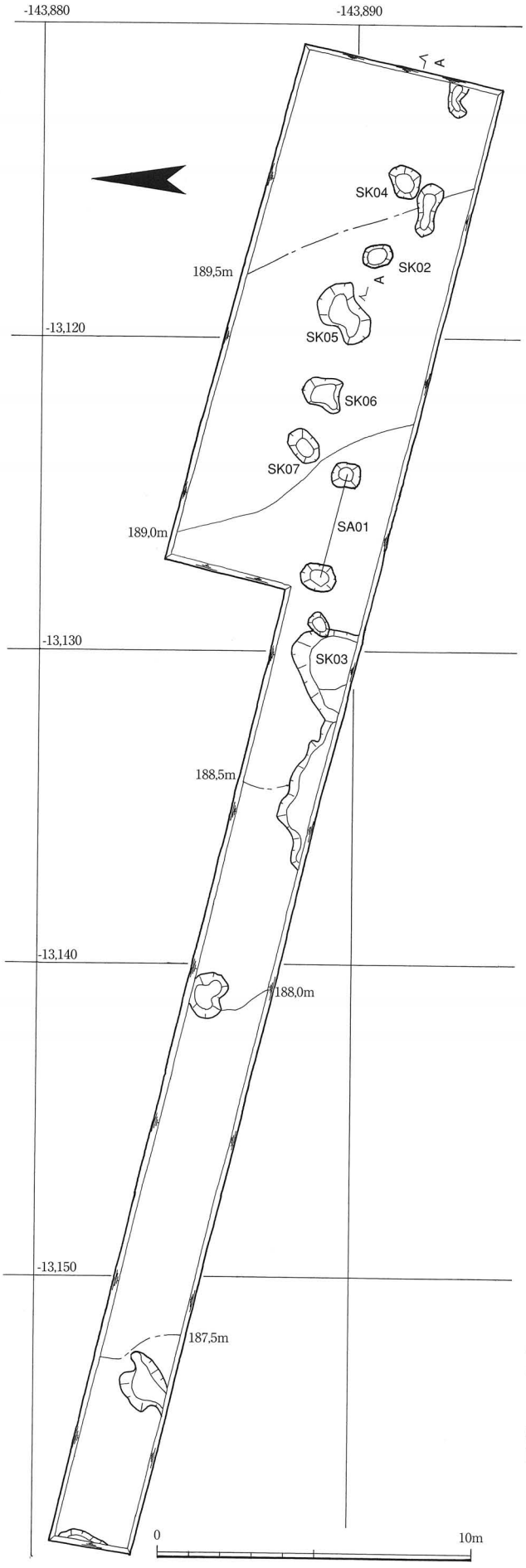
調査の結果、掘立柱列を検出したことで、瓦窯、または、辻堂に関係する建物等の可能性が考えられる。しかしながら、瓦や土器等の遺物が出土していないことから、明確に判断するに至らなかった。　（秋山成人）

1)『京都府遺跡地図 第５分冊』京都府教育委員会 1989

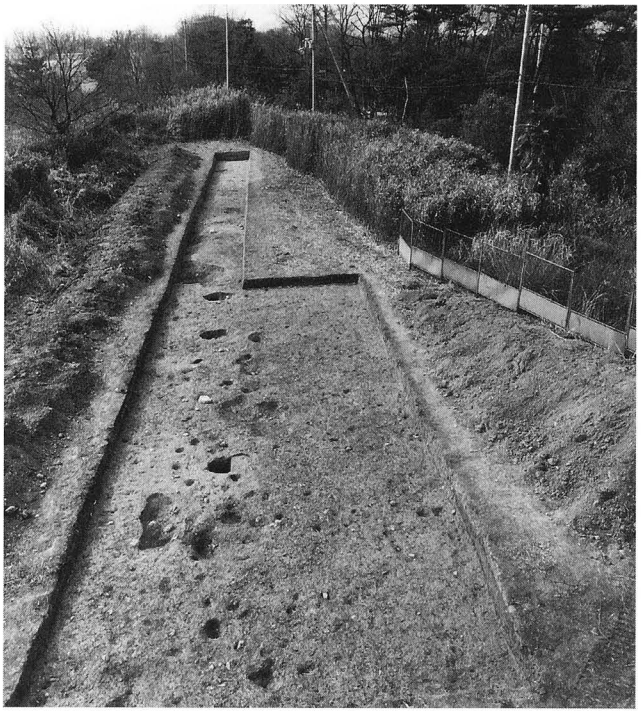
2)『奈良市史 通史２』奈良市 1994

3)『平野瓦窯跡発掘調査報告書』木津町教育委員会 1998

4)『奈良市埋蔵文化財調査報告 平成２年度』奈良市教育委員会

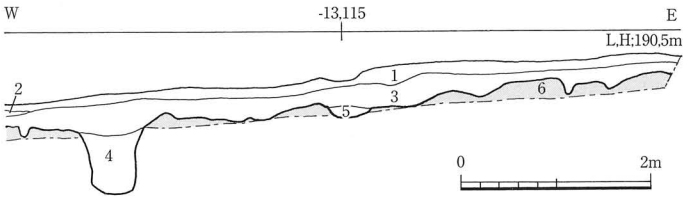


第１次調査　遺構平面図　1/200



発掘区全景（東から）

発掘区全景（西から）



1　暗灰色土　　3　黄褐色土　　5　黄褐色粘質土(SK04)
2　暗赤褐色土　　4　黄褐色粘質土(SK02)　　6　赤灰色粘質土(地山)

Ａライン土層図　1/80

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成15年度

平成18年3月29日　印刷
平成18年3月30日　発行

編集　文化財課　埋蔵文化財調査センター
（奈良市大安寺西二丁目281番地
電話番号：0742-33-1821）

発行　奈良市教育委員会
（奈良市二条大路南1丁目1番1号）

印刷　株式会社　明新社
（奈良市南京終町3丁目464番地）